

津阪東陽『杜律詳解』 訳注稿 (九)

二宮俊博

本稿には、津阪東陽『杜律詳解』巻中の「登楼」詩から「至後」詩までを収める。原文の「ノ」は「シテ」に、「」は「コト」に、「仄」は「トモ」にそれぞれ改めた。明らかに訓点が脱落していると思われる箇所には、これを補った。また詩句の左傍にとこころ附されている和訓は、※をつけて改行して示した。書き下し文は、紙幅の都合で省略する。なお、詩題の上には便宜的に通し番号を施した。

- 063 登楼
- 064 宿府
- 065 院中晚晴懷西郭茅舍
- 066 奉寄高常侍
- 067 暮登西安寺鐘樓寄裴十迪
- 068 陪李十七司馬皂江上觀造竹橋即日成往來免冬寒入水聊題短述
簡李公
- 069 野人送桜桃
- 070 章梓州橘亭餞成都寶少尹得涼字
- 071 奉侍嚴大夫
- 072 至後

063 登樓

廣徳元年十月、吐蕃犯闕^(注1)、代宗出^三奔^ス陝州^二。郭子儀收^二復^ス京師^一、車駕還^ル都^二。此其明年春、公偶因^三登樓^二眺望^一、感^{シテ}而作也。吐蕃^ハ本西羌^ノ屬^ス。種類散^{シテ}處^ニ河湟洮岷^ノ間^一。隋ノ開皇中有^二論贊^一者^(注3)、滅^{シテ}吐谷渾^ヲ、盡^ク有^ニ其地^一。唐ノ貞觀中始^テ通^ニ中國^一。其後屢^ク入^テ寇^ス。爲^ニ當時ノ巨患^一。王粲有^二登樓賦^一、傷^ニ亂離^一而作^ス。此蓋取^レ之^ヲ也。

(注1) 顧宸『註解』に「代宗の広徳元年十月、吐蕃、京師を陥れ、帝、陝州に幸す。郭子儀、京師を収復し、車駕還る。明年の春、公、成都に在りて、樓に登るに因つて此の作有るなり」と。陝州は、今の河南省陝県。

『註解』は宇都宮遷庵の増広本にも挙げる。

(注2) 『新唐書』卷二一六上、吐蕃伝上に「吐蕃は本と西羌の属。蓋し百有五十種有り、散じて河湟江岷の間に処る」と。河湟は、黄河と湟水。湟水は、青海北方の山中に源を発し、蘭州の西の新城で黄河に合流する。江岷は、長江と岷江。岷江は、四川省北方の山地に源を発し、松潘・茂県・成都を通つて宜賓で金沙江に合する。長江の上流の一つ。詳解にいう洮岷は、洮河と岷江。洮河は、甘肅省臨洮県の西北に源を発し、蘭州附近で湟水と合流する。なお、『新』『旧』唐書の吐蕃伝については、平凡

杜東洋文庫『騎馬民族史3—正史北狄伝』（一九七三年）に訳注を収める（佐藤長執筆）。

〔注3〕『大明一統志』卷八十九、西蕃に「西蕃は即ち吐蕃なり。（中略）隋の開皇中、論贊素なる者洮河の西に居り、唐の貞觀中、始めて中国に通ず。既にして吐谷渾を滅ぼし、尽く其の地を有す」と。

〔注4〕王燦については、訳注稿（八）、055「將に荆南に赴かんとして李劍州弟に寄別す」詩の詳解に、魏の王粲、字は仲宣、漢の末西京擾乱を以て、荆州に之き劉表に依る。江陵の城樓に登つて思郷の賦を作る」云々と見え、その（注20）参照。

広徳元年（七六三）十月、吐蕃が宮闕を犯し、代宗は陝州に出奔した。郭子儀が京師を回復し、天子の車駕は都に還御した。これはその翌年の春、公がたまたま「樓」に「登」つて眺望したことから、心感じて作ったものである。吐蕃はもともと西羌の属である。種族が散らばつて河湟・洮岷の間にいた。隋の開皇年間（五八一〜六〇〇）に論贊なる者があらわれ、吐谷渾を滅ぼして、ことごとくその地を領有した。唐の貞觀年間（六二七〜六四九）にやつと中国に好を通じたが、その後、しばしば入寇し、当時の大きな災難で悩みの種であった。王粲に「登樓の賦」があり、乱離を傷んで作った。これはけだしそこから取っているのだ。

花近ニ高樓ニ傷ニ客心ニ 萬方多難ニ此ニ登臨ス

時屬ニ盛春ニ、芳景爛漫、高樓登臨、觸レ目ニ皆花、而近樓ニ花枝倚レ檻ニ堪レ弄ニ、尤可ニ賞愛ス。乃不レシテ樂マ而反テ傷レ心、是何等ノ時ソ邪。次乃解ニ其故ヲ。去年吐蕃之寇、不ニ止（中原ノミヲ）、蜀亦陷（松維保三州）。於今ニ未レ復セ、故ニ曰「萬方多難」ト。此ノ字指ニ蜀ノ成都ヲ、嘆ニ遠地ニ也。孤客流ニ寓シテ天末ニ、而逢ニ萬方多難之禍ニ。即平日所ノ娛芳景、視テ傷心之物ト、所謂感レ時ニ花ニ濺レ涙ニ也。二句妙在倒裝（注7）。若一倒轉（セハ）、與近人詩何異ナラ。下皆由矚（スル）ニ目ヲ四方ニ敘（ス）之。錦江玉壘、西山後主、皆係蜀ノ事ニ。此ノ字所レ關也。此詩通篇主意ノ所寓（スル）、皆萬方多難之事、而其所レ見ル者、此登臨之

景也。余嘗テ語學者、七律第二句ハ領ニ全首ノ詩神ヲ、下皆從レ此生（注5）。一篇爭レト勝ヲ在レ此ニ、畫龍點睛（注6）要處。其不レ然乎。又篇中寓意極テ大而卻從ニ花近ニ高樓ニ起（注7）。是芥子納須彌（注8）手段。讀者未ニ嘗テ看出（セ）、負コト良工ノ苦心（注9）久シ矣。

〔注5〕徐增「而庵說唐詩」（卷十九）に「此の字、蜀の成都を指すなり」と。〔注6〕邵傳「集解」に「花高樓に近くして登臨の反つて心を傷ましむる者は、萬方多難の故なり。所謂時に感じて花に涙を濺ぐなり」と。〔花に感じて云々は、「春望」詩（詳註卷四）の第三句。〕

〔注7〕沈德潛「杜詩偶評」（卷四）に「妙は倒裝に在り。若し一たび倒転せば、近人の詩と何ぞ異ならん」と。「花高樓に近くして此に登臨し、萬方多難にして客心を傷ましむ」だと平凡でありきたりになるといふのである。ちなみに、黃生「杜工部詩說」（卷八）に「首二句、後人に在つては、必ず「花高樓に近くして此に一臨し、萬方多難にして客心を傷ましむ」と云はん。蓋し唐賢の運意曲折、造句參差の妙を知らざる耳」と。

〔注8〕「夜航詩話」卷一に「蓋し七律の首句は宜しく突然として起り、勢ひ遏む可からざるべし。工なり難き所以なり。然れども此れ猶ほ能くす可し。第二句の好は、尤も得難し。蓋し此の句は全首の詩神を領す。句句皆此れ從り生ず。一篇勝を爭ふ此に在り。画龍点睛の要處にして、其の力を用ふる所、人をして覺らざらしむるに在り、尤も難き所以なり」と。

画龍点睛は、唐の張彦遠「歷代名画記」卷七、南朝梁・張僧繇の条に「又金陵の安樂寺の四白龍は眼睛を点ぜず。毎に云ふ、睛を点すれば即ち飛び去らんと。人以此妄誕と為し、固く之に点ぜんことを請ふ。須臾にして雷電壁を破り、兩龍は雲に乘じ、騰去して天に上る。二龍の未だ眼を点ぜざる者は見在す」という故事に基づく。關鍵となるところに精彩ある表現を用いて主旨を明らかにし、内容をさらに生き活きと力強くさせることをいう。

〔注9〕鳩摩羅什訳「唯摩詰所說經」不可思議品に「若し菩薩の是の解脱に住する者は、須弥の高広を以て芥子中に内るるに増減する所無し。須弥山王の本相故の如し（中略）唯だ応に度すべき者は、乃ち須弥の芥子中に

入るを見る」と。須弥山は、梵語 *sumeru* の音訳語。世界の中心に聳え立つ高山。芥子は、ケシ粒。

(注10) 「良工の苦心」は、杜甫の「李尊師が松樹の障子に題するの歌」(詳註巻六)に「已に知る仙客意相親しむを、更に覚ゆ良工心独り苦しむを」とあるのに基づく語。

時は盛春に属し、花咲き匂う春景色は爛漫として今が盛り、《高楼》に《登臨》すれば、目に触れるものすべて花ばかりで、《楼》に《近き》《花》枝は欄干によりかかって賞玩するにちようどよく、もつとも賞愛することができる。ところがなんと楽しまいでかえって《心》を《傷》めさせるのは、いったいどういう時であらうか。次はその理由を解いている。去年の吐蕃の入寇は、ただ中原だけにとどまらず、蜀でも松・維・保の三州が陥落し、現在でもまだ回復しておらず、それゆえ《万方多難》という。《此》の字は、蜀の成都を指し、首都長安から遠く離れた僻地であることを嘆じているのである。寄るべき孤客として天涯に流寓し、《万方多難》の禍乱にゆきあった。つまり平生なら娛しめる芳わしい春景色が、それを視て傷心の対象物となっており、いわゆる「時に感じて花に涙を濺ぐ」である。二句の妙味は、倒装にある。もし「たびひつくりかえせば、近人の詩とどうして異なるうか。以下いずれも四方を瞞目してこれを叙している。《錦江》《玉壘》や《西山》《後主》は、いずれも蜀の事柄にかかり、《此》の字が関わるところである。この詩全体の主意の寓するところは、みな《万方多難》のことで、その見るところのもの、《登臨》の景である。私はかつて初学の者に、「七律の第二句は一首全体の精神や気分を支配し、以下みなこれから派生し、一篇のすばらしさを競うのはここにある。画龍点睛の肝腎かなめのところだ」と語ったことがある。ほんとうにそれそうではないか。そのうえ篇中の寓意は極めて大であるのに、却って《花高楼に近し》より言い起こす。これぞ芥子中に須弥山を納れる手段だ。この詩を

読む者はいまだかつてそのところを見抜けず、良工の苦心にそむくこと久しい。

錦江／春色来リ天地ニ 玉壘／浮雲變ス古今一

上句與一起句花ノ字通氣^(注11)。下句承第二句^(注12)。春色来ニ天地ニ言^(注13)淑景遍^(注14)天地間ニ。猶言^(注15)言^(注16)滿^(注17)世界ニ。狀^(注18)兵禍之慘稍定^(注19)、太平之象方^(注20)萌^(注21)也。變^(注22)者聚散倏忽、變化無^(注23)常也。浮雲變ス古今一^(注24)言^(注25)亂臣賊子何ノ代^(注26)カ無^(注27)レシ之。然^(注28)トモ倏忽變滅、若^(注29)浮雲^(注30)然^(注31)リ。即吐蕃犯^(注32)關^(注33)、亦已敗走、江山依然、天日維新^(注34)也。古今ノ二字係^(注35)古來據^(注36)蜀^(注37)反^(注38)者之跡^(注39)。段子璋徐知道在^(注40)其中^(注41)矣。特^(注42)用^(注43)錦江玉壘^(注44)取文字之雄麗^(注45)、以寓^(注46)太平之慶^(注47)也。上句宏壯、下句沈渾、天地古今、議論正大、豈徒^(注48)摸^(注49)寫^(注50)江山^(注51)而已哉。前人謂^(注52)二句可^(注53)抵^(注54)一篇^(注55)王命論^(注56)、非^(注57)過稱^(注58)也。余嘗謂此聯杜律中^(注59)壓卷^(注60)、乃是古今來^(注61)擅場^(注62)、眞^(注63)天工非^(注64)人力^(注65)也。石林詩話^(注66)云、七言難^(注67)於氣象雄渾^(注68)。句中有^(注69)力^(注70)而紆餘^(注71)不^(注72)失^(注73)言外之意^(注74)者、自^(注75)老杜^(注76)錦江玉壘^(注77)之後、常^(注78)恨無^(注79)復繼^(注80)者^(注81)。此已^(注82)先^(注83)我^(注84)言^(注85)之^(注86)矣。

(注11) 「唐詩貫珠」(卷三十八、登眺)に「三は花と氣を通ず」と。

なお、胡炎亭は、「來」字を《流》に作り、「流或いは來に作る。然れども來字、一に情致無し。流字靈活、世界に満つるの意有り。況んや來字は地字と竟に属せず矣」と。

(注12) 原文は遍字の下に「二」点を缺く。今、これを補う。

(注13) 乱臣賊子は、君を弑する臣、父を弑する子。古くは『孟子』滕文公篇上に「孔子、春秋を成して、乱臣賊子懼る」と見える。

(注14) 天日は、天空にかかる太陽。天子を象徴する。維新は、旧來の面目を改めて一新する。『詩經』大雅・文王に「周は旧邦と雖も、其の命維れ新たなり」から出た語。維は、発語の辭。

(注15) 「唐詩集註」(巻五)に「黄云ふ、三句宏麗、四句沈渾」と。その凡例に拠れば、黄は黄道周(一五八五―一六四六)のこと。天啓二年(一六二二)の進士で、『明史』巻二五五に伝がある。

(注16) 元・方回「瀛奎律髓」(卷二十七、登覽類)に「老杜七言律詩一百五十九首、當に写して以て常玩すべし、暫しも廢す可からず。今、登覽中に

於いてこれを選んで式と為す。錦江・玉墨の一聯、景中情を写す。後聯却って明らかに説破す。道理此の如し、豈に徒に江山を模写するのみならんや」と。

〔注17〕『杜詩偶評』に「二語、前人、一篇の王命論に抵ると謂ふ」と。前人は、申涵光のこと。詳註（卷十三）に引く。「王命論」は、後漢・班彪の作（『文選』卷五十二）。なお、申涵光については、訳注稿（六）、055「將に荆南に赴かんとして李劍州弟に寄別す」詩の（注19）参照。

〔注18〕他に見えるところあるのか、不明。『夜航詩話』や『夜航餘話』には、見当たらない。

〔注19〕南宋・葉夢得『石林詩話』巻下に「七言は氣象雄渾なるに難し。句中力有り、而して紆徐として言外の意を失せざるは、老杜の（錦江の春色天地に來り、玉墨の浮雲古今變ず）と（五更の鼓角声悲壯、三峡の星河影動搖）等との句自りの後、嘗に復た繼ぐ者無きを恨む」と。「五更」云々は、107「聞夜」詩の領聯。ちなみに、『石林詩話』は、南宋・胡仔『茗溪漁隱叢話』前集卷十に引くが、（紆徐）の（徐）字を（餘）に作る。また度会末茂『杜詩評叢』に挙げるのも同様。（紆徐）は、ゆつたりとのびやかで趣きあるさま。量韻の語。（紆餘）もほぼ同じ。やはり量韻の語。上句は起句の（花）字と氣脈を通じている。下句は第二句を承ける。（春色天地に來たる）は、春の和やかな光が天地の間に遍在することを言う。世界に満つと言うのとほぼ同じ。兵禍の慘状がやや落ち着き、太平の象がまさに萌すことを形容するのである。（變）は、たちまち聚まりたちまち散じて、變化常なきことである。（浮雲古今變ず）は、乱臣賊子はどうな時代にもいるが、されどたちまちのうちに變化消滅すること、（浮雲）のごとくであり、たとえ吐蕃が宮闕を犯しても、やはりすでに敗走し、江山は依然として変わらず、天空の太陽は改めて輝きを取り戻したことを言うのである。（古今）の二字は、古来蜀に拠って叛した者の事跡にかかる。段子璋・徐知道がそこに含まれている。特に（錦江）（玉墨）の語を用いるのは、文字の雄渾華麗なるを取り、もって太平の慶びを寓するのである。上句は宏壯で、下句は沈渾。（天地）（古今）は、議論正大で、どう

して江山を模写するだけでおわるうか。前人がこの二句を「王命論」一篇に匹敵するとみたのは、過褒ではないのである。私はかつてこの一聯を杜律中の圧巻だとしたが、なんとも古今以来の独擅場であり、真に天成の巧みさであつて人力で能くし得るものではないのだ。『石林詩話』に云う、「七言は氣象雄渾であることに難しく、句中に力がありゆつたりとのびやかで言外の意を失わないのは、老杜の（錦江玉墨）以後、ずっと二度と後を繼ぐ者がいないのが遺憾だ」と。これはすでに私に先んじてこのことを言っている。

北極・朝廷終不_レ改_二 西山ノ寇盜莫_二相侵_一ス

此聯樓上望_二西北_一也。上句承_二三ノ句_一。北極ハ謂_二長安_一。終不_レ改_二言_二危_一而復安_一。時ニ吐蕃敗還、乘輿反_レ正、故ニ云。下句承_二四ノ句_一。西山ノ寇盜ハ指_二吐蕃_一。望_二野_一詩ニ所_レ云西山ノ白雪三城ノ戌、今皆陷_二於吐蕃_一。蓋去年之亂、雖_二朝廷失_レ守、天子蒙塵_一、然_レ勤王之師立_二ト_一復_二神州_一。舊物不_レ改、金甌無_レ虧_一。是天命有_レ歸_一ス。終不_レ可_レ犯_一。則_二蠢爾_一蕃戎、徒_二勞_一何爲_一哉。其_レ須_二懲而忿_一後、勿_二復_一蝗斧來襲_一也。前聯景中寓情、此喻蘊含。至此直_二述_一事實_一、明_二示_一道理_一。請看_二皇皇_一天朝、豈盜賊所_レ得_一而覬覦_一者ナラシ哉。

〔注20〕この言い方、『資治通鑑』卷七十八、魏紀十、咸熙元年（二六四）正月の条に、蜀漢の姜維が魏に降った後主に送った密書に「臣、社稷をして危くして復た安く、日月をして幽くして復た明らかならしめんとす」と見える。

〔注21〕輯註（卷十二）に黄鶴の注を引いて「郭子儀、京師を復して、乘輿正に反る、故に（朝廷終に改めず）と曰ふ」と。宇都宮遼庵の増広本にも挙げる。（乘輿）は、天子の車。（反正）は、正道にもどる。

〔注22〕邵傳『集解』に（寇盜）の下に（吐蕃）と注し、薛益『分類』（巻下、樓閣）に「寇盜は吐蕃を謂ふ」と。宇都宮遼庵の増広本にも挙げる。

〔注23〕訳注稿（六）、040「野を望む」詩の第一句。

〔注24〕中原、特に都をいう。例えば、『世説新語』言語篇に「唯だ王丞相（王

導)のみ色を變じて曰く、^{まさ}共に力を王室に戮せ、神州を克復すべきに、何ぞ楚囚と作りて相對するに至らんや」と。

(注25) 旧物は、国家伝来の文物制度。例えば、『左伝』哀公元年に「少康、夏を祀り天に配し、旧物を失せず」とあり、中唐の陸贄「昊天上帝に告謝する冊文」(『陸宣公全集』卷二十)に「旧物改めず、神心載ち新たなり」と。

(注26) 国土が外敵の侵略を受けたことのない喩え。『南史』朱异伝に「(武帝)独言すらく、我が国土は猶ほ金甌の若し。一として傷み缺くる無し」と。

(注27) 『三國志』卷三十五、蜀書五、諸葛亮伝の贊に「蓋し天命帰する有り、智力を以て争ふ可からず」と。

(注28) 邵傳『集解』に「蠡爾たる西寇、輕く犯すことを得ること母れ」と。

〈蠡爾〉は、『詩経』小雅・采芣に「蠡爾たる蛮荆、大邦を讐と爲す」というのに基づく語。その集伝に「蠡は、動きて無知の貌」と。

(注29) 『詩経』周頌・小毖に「予其れ懲りたり、而して後患を^{おそ}む」と。

(注30) 螳螂の斧。弱小の者が己れの力量を弁えずに立ち向かう喩え。螳螂は、カマキリ。螳螂・螳螂・螳螂にも作る。例えば、『文選』卷四十四、三國魏・陳琳「袁紹の爲に予州に檄す」文に「螳螂の斧を以て、隆車の隧を禦がんと欲す」とあり、その李善注に『莊子』人間世篇の「蓬伯玉、顔闔に謂ひて曰く、汝、夫の螳螂を知らざるか。その臂を怒らせて車轍に当たる。其の任に勝へざるを知らざるなり」というのを挙げる。

この聯は楼上から西北を望んでいるのである。上の句は第三句を承ける。〈北極〉は、長安のこと。〈終に改めず〉は、危機に瀕しても復た安んずることをいう。時に吐蕃は敗れて引き返し、天子の車駕は首都長安にかえり正しい秩序にもどったので、それゆえ云う。下の句は第四句を承ける。〈西山の寇盜〉は、吐蕃を指す。「野を望む」詩に云うところの「西山の白雪三城の戌」は、今どこも吐蕃におちた。けだし去年の乱では、朝廷は守りを失し、天子は蒙塵されたけれども、されど勤王の師が立ちどころに神州たる中原を回復した。国家の文物制度は変わらぬままあり、金甌は缺けることがなかった。これぞ天命は帰することあり、結局は犯すことができな

のであつて、だとすればもともと愚かしげに動き回る蕃戎どもは、いたずらに勞するだけで何をなさうか。前事に懲りて後を慎み、もう二度とちゃんや螳螂の斧を振りかざして来襲するでないぞ、というのである。前聯は景中に情を寓し、この喩えを包含するが、ここに至つてただちに事実を述べ、明らかに道理を示している。——見よ輝かしい朝廷は、どうして盜賊どもの窺い望むことのできるものであろうか。

可憐後主還祠廟 日暮聊爲梁父吟

※可憐：シユシヤウナリ 還：ヤハリ

蜀先主ノ廟在成都錦官門ノ南ニ。西挾ハ即武侯ノ祠、東挾ハ即後主ノ祠。此亦高樓所見、近ク在二目下ニ。與二起句一相應シテ作レ結ヲ。可憐感ニ嘆スル蜀人之厚キヲ。還者不レシテ可レ然レ而然之辭。夫、盛徳ハ百世ニシテ祀ル、後主ハ亡國之君、昏庸不レ足レ齒ルニ、何ソ以二祠廟ヲ爲ス。然トモ先主ノ嫡嗣ニシテ而正統ノ天子、故ニ蜀人敬シ之ヲ、同ニ武侯ノ附祀ニシテ、至レテ今ニ祠廟儼然ヲ。豈不レ感ニ嘆セ其厚ヲ哉。此緊シク承テ不レ改莫レレ侵ススコト、以戒下觀ニ觀スル非望ヲ者上。論皇室雖ニ衰微スト、而高祖太宗之正統不レ可レ不ニハル宗敬ニ焉。此所ニ以用ニ還ノ字ヲ也。梁父吟ハ蓋古歌也。或ハ謂ニ武侯所レ作、恐ハ非。蜀志本傳ニ亮躬ニ耕シ隴畝ニ、好テ爲ニ梁父吟一、可レ見已。公登レ樓ニ悵望シテ感ニ慨時事ヲ、日暮索莫、傷心益ク深シ。歌ハ可ニ以遣レ憂ヲ、故ニ聊吟シテ梁父ヲ、以自慰スル也。蓋因ニ後主ノ事ニ感シテ而懷ニ武侯ヲ。昔蜀漢全ク頼ニ武侯ニ而治。今得ニ有如下ニ武侯其人ノ者上、又何ソ患ニ其不レ治ヲ哉。慨三世之多ニ逆臣ニ而益ク欽ニ其忠誠ヲ、傷心極ル矣。沈歸愚云、三句野馬細縈、極目萬里。四句蒼狗變幻、瞬息千年。通篇氣象雄偉、籠蓋宇宙ヲ。此杜詩之最上ナル者。

(注31) 顧宸「註解」に「能改齋漫錄に云ふ、蜀の先主の廟は成都錦官門外に在り、西挾は即ち武侯の祠、東挾は即ち後主の祠。所謂(後主還祠廟)は、見る所を書して以て概を志すなり」と。

なお、輯註に錢注として「呉曾漫錄に蜀先主の廟は成都錦官門外に在り、西挾は即ち武侯祠、東挾は即ち後主祠。蔣公堂、蜀に帥するに、（劉）禪の土宇を保有する能はざるを以て、始めて之を去る。所謂（後主還た祠廟）は、見る所を書して以て慨を志すなり」というのを引くが、この条は錢注（卷十三）に見えず、宋・呉曾『能改齋漫錄』の通行本にかかる記述は見当たらない。

（注32） 積大典『詩語解』卷上、還の条に「龍鍾^レ還^ス三^ニ千石^ヲ」、「可^レ憐後主^ヲ還^ス祠廟^{アル}ト」、「野僧^モ還^ス欲^ム廢^{シテ}禪^ヲ聽^シト」（笈、皎然）の句例を挙げて、「不^レ可^レ然^ル而^{シテ}然^ル之^ヲ辭^ト」と。龍鍾云々は、高適「人日、杜二拾遺に寄す」詩（『唐詩選』卷二）の第十一句。

（注33） 『左伝』昭公八年に史趙の言として「盛徳は必ず百世^マ祀^ルる」と。

（注34） 『而庵説唐詩』（卷十九）に「後主は亡国の君なり。昏庸^モするに足らず。今に至つて蜀人猶ほ之を思ひ、尚ほ祠廟有り」と。

（注35） 梁父吟は、漢代の樂府、相和歌の古辭。宋・郭茂倩『樂府詩集』卷四十一、相和歌辭十六に、南朝陳・韋智匠の『古今樂録』を引いて、「蜀志に曰く、諸葛亮好んで梁父吟を為すと。然らば則ち亮に起こらず矣」と。その歌辭は、次のごとくである。

歩出齊城門 遙望蕩陰里 歩して齊の城門を出、遙かに蕩陰里を望

む

里中有三墓 累累正相似 里中に三墓有り、累累として正に相似た

り

問是誰家墓 田疆古冶子 問ふ是れ誰が家の墓ぞ、田疆 古冶子

力能排南山 文能絕地紀 力能く南山を排し、文能く地紀を絶す

一朝被讒言 二桃殺三子 一朝讒言を被り、二桃三子を殺す

誰能爲此謀 國相齊晏子 誰か能く此の謀を為す、國相齊の晏子なり

り

（注36） 邵傳『集解』に「梁父の吟は、葛亮の作」、薛益『分類』に「梁父の吟は、孔明の作る所」と。

ちなみに、鈴木虎雄『杜少陵詩集』（卷十三）に「仇氏、黄生の説を引き、梁父吟は即ち登樓詠する所の作を指す、これ別に一説なりといへり。余は黄生の説に賛す、余は別に一證を挙げん、作者の『同李太守登歷下古城員外新亭』詩の終りに、不^レ阻^ス蓬華興、得^レ兼^ス梁甫吟といへる梁甫吟

は自作をさす、今此処も同意とみるべし。作者平生、諸葛亮のごとき人物を以て自任するが故に自作を梁甫吟を以て比するものなることは言ふまでもなし」云々と解する。

（注37） 『三国志』卷三十五、蜀書五、諸葛亮伝。

（注38） 『而庵説唐詩』に「蜀漢は全く諸葛武侯に頼る。若し兩川を謀る者に武侯の如きを得ば、又た何ぞ西山の寇盜を患へんや」と。

（注39） 『杜詩偶評』に「氣象雄偉、宇宙を籠蓋す。此れ杜詩の最上なる者」と。但し、『三句野馬細細』以下、『瞬息千年』までの二十字は、『唐詩集註』（卷五）に引く明・蔣一葵の評語。ちなみに、顧宸『註解』にも「万

方多難と曰ふ、野馬細細、蒼狗變幻を將て、尽く登臨一覽の中に在り」と。野馬は、陽炎。細細は、盛んにたちこめるさま。双声の語。極目千里は、戦国楚の宋玉「招魂」（『楚辭』卷九）の「目を千里に極め春心を傷む」から出た語。蒼狗變幻は、杜甫「歎ず可し」詩（詳註卷二十一）の冒頭の二句「天上の浮雲は白衣に似たり、斯須改変して蒼狗の如し」に基づく語。変化して常なきことを喩える。蒼狗は、灰色の犬。瞬息は、一度のまばたきと一回の呼吸。極めて短い時間をいう。なお、沈徳潜の評語は、『唐詩集註』にも挙げる。

蜀先主（劉備）の廟は、成都錦官門の南にある。それを中心として西側が武侯祠、東側が後主（劉禪）の祠。これもやはり高樓から見えたもの、間近で眼下にある。起句と応じて結びとする。（『憐れむ可し』は、蜀人の厚情に感嘆する。（『還』とは、本来そうあつてはならないのにそうであるという辞。そもそもりっぱな徳のあつた人は百代にわたつて祀られるが、（後主）は亡国の君主で、昏庸よりは齒するに足らず、どうして（祠廟）を建てることがあろうか。されど先主の嫡嗣にして正統の天子であつて、それゆえ蜀人はこれを敬い、武侯とともに附祀して、今に至つて（祠廟）は蔽かである。その厚情に感嘆せずにおられようか。これはびたつと（改めず）（侵すこと莫かれ）を承け、そうして分不相応の大それた望みを抱き帝位を窺う者を戒め、皇室は衰微したとはいえ、高祖・太宗の正統を重んじ敬わないではいけないことを論じている。これが（還）字を用いる

ゆえんである。〈梁父吟〉は、けだし古歌であろう。あるいは武侯の作るところというのは、恐らく正しくない。『蜀志』本伝に「諸葛亮、隴畝に躬耕し、好んで梁父吟を為す」ということから、わかるのだ。公は〈樓〉に〈登〉って悵望して時事に感慨を発し、〈日暮〉れてうら寂しく傷心はますます深かった。歌は憂を晴らすことができるので、それゆえ〈聊〉か〈梁父〉を〈吟〉じ、自ら心慰さめたのである。けだし〈後主〉の事にちなんで心感じて武侯を懐うのであろう。昔、蜀漢は全く武侯のおかげで治まった。今、武侯その人のような者がおれば、この上どうしてその治まらないのを心配しようか。世に逆臣が多いのを慨嘆し、ますますその忠誠を欽慕しており、傷心が極まっている。沈疇愚が云う、「第三句は野馬が盛んにたちこめ、目を万里に極むというふぜい。第四句は浮雲が変幻して蒼狗のようになり、瞬く間に千年が経つといったありさま。一篇全体が氣象雄偉で、古今の天地をすっぱり覆いつくしている。これは杜詩の最上のものである」と。

064 宿府

廣徳二年六月、嚴武奏^レ公爲^二節度參謀^一。故^二直宿^一其府中^二。時秋^ニ夜長^{シテ}、不^レ寐^{ラレ}有^レ感^{スル}コト而作也。唐書本傳^ニ以^三公充^二幕官^一爲^二初^一入^レ蜀^ニ時ノ事^ト、謬^レリ矣。

〔注1〕 宇都宮遷庵の増広本に挙げる明・単復の年譜、広徳二年（七六四）の条に「六月、（嚴）武奏して節度參謀・檢校工部員外郎と爲し、緋魚袋を賜ふ」と。

〔注2〕 『旧唐書』杜甫伝に「上元二年（七六二）冬、黃門侍郎・鄭国公嚴武、成都を鎮し、奏して節度參謀・檢校尚書工部員外郎と爲し、緋魚袋を賜ふ」と。

広徳二年六月、嚴武が公のことを奏上して節度參謀とした。それゆえその役所内に宿直している。時は秋で夜は長く、寝つかれずに

感ずることがあつて作つたのである。『唐書』本伝に公が幕官に充てられたのを蜀に入ったばかり時のことだとするのは、謬りだ。清秋幕府井梧寒^シ 獨宿江城蠟炬殘^ル

※独宿：ひとりばん 残：スガル

大將ノ所^レ居曰^二幕府^一。本軍中之號。謂^二設^レ幕^一爲^二府^一。見^二史記^一李廣^ニ傳^一。唐^ノ節度使以^二幕府^一稱^ス。成都城枕^二江^一、故曰^二江^一城。井梧寒^ハ言^二秋深^一。蠟炬殘^ハ言^二夜深^一。蓋府中秋氣正^ニ深^一、井上梧桐風寒^シ。一城皆已^ニ寂靜^一、而我獨不^レ能^レ寐^一。夜闌^ニ殘燭^一耿耿、尤不堪^ニ寂寥^一也。魏^ノ明帝詩^ニ雙梧生^二空井^一、井梧本^レ此^一。

〔注3〕 『史記』卷一百九、李將軍列伝に「莫府は文書籍事を省約す」と見える。なお、『漢書』李広伝の顔師古注に「莫府は、軍幕を以て義と爲す。（中略）軍旅常無く居止す。故に帳幕を以て之を言ふ」と。莫と幕は通用。

〔注4〕 『唐詩貫珠』（卷五十、秋）に「第二句、江上を提出す。一城皆已に寂靜、我独り未だ睡らざるを言ふ」と。

〔注5〕 顧宸「註解」に「魏の明帝の詩に、双梧空井に生ずと。井梧此に本づく」と。宇都宮遷庵の増広本にも挙げる。三国魏・明帝（曹叡）の詩句は、その「猛虎行」（『藝文類聚』卷八十八に引く）に見える。但し「梧」字を「桐」に作る。

なお、宋・郭茂倩『樂府詩集』卷三十一、相和歌辭六・猛虎行に「魏・明帝が辭に曰く、双桐空枝に生じ、枝葉自ら相加ふ。通泉其の根に漑ぎ、玄雨其の柯を潤す」と。また南朝陳・釈智匠「古今樂録」の「王僧虔「技録」（大明三年宴樂技録）に曰く、『荀録』（荀氏録）に載せる所の明帝「双桐」の一篇、今伝はらず」というのを引く。ちなみに、南朝梁・簡文帝の樂府に「双梧生空井」（『玉台新詠』卷七）がある。

大將の居るところを〈幕府〉という。もとは軍中の呼び方。幕を設けて府（役所）となすこと。『史記』李広伝に見える。唐代の節度使は〈幕府〉をもつて称する。成都は蜀江に臨んでおり、それゆえ「江城」という。「井梧寒し」は、秋が深いのを言う。「蠟炬残る」は、

夜が深いのを言う。けだし役所内は秋の気配がまさに深く、井戸の傍にある梧桐に吹く風は寒い。一城がもはやしいんと静まりかえっているのに、自分ひとり寝つかれず、夜はすつかり更けて消えなかった灯がちらちらと光って、もつとも寂寥にたえられないのである。魏・明帝の詩に「双梧空井に生ず」と。《井梧》は、これにもとづく。

永夜ノ角聲悲テ自語ル

中天ノ月色好モ誰カ看ム

上五下二ノ句法。^(注6)角ハ即唳囉。軍中警嚴之音。自ノ字有ニ在彼ニ而不^(注8)關^(注9)我^(注10)之^(注11)意^(注12)。中天ノ月色ハ謂^(注13)三月至^(注14)三天心^(注15)。自語^(注16)誰^(注17)看^(注18)承^(注19)テ獨宿^(注20)而言^(注21)。時備^(注22)吐蕃^(注23)、永夜角聲不^(注24)絶^(注25)、彼此應和^(注26)シマ、悲如^(注27)ニ相語^(注28)。於^(注29)テ萬籟俱^(注30)寂^(注31)中^(注32)、傳^(注33)此清切之聲^(注34)、不^(注35)レ^(注36)寐^(注37)而聞^(注38)之^(注39)、使^(注40)二人^(注41)傷^(注42)心^(注43)。月至^(注44)中天^(注45)、皎皎如^(注46)畫^(注47)、然^(注48)トモ無^(注49)二人^(注50)共^(注51)看^(注52)。雖^(注53)好^(注54)亦奚^(注55)爲^(注56)。竝^(注57)ニ以^(注58)無情^(注59)爲^(注60)有^(注61)情^(注62)、極^(注63)寫^(注64)幕府獨宿^(注65)之苦^(注66)。胡^(注67)燮^(注68)亭^(注69)云、悲^(注70)自語^(注71)ハ奇情也。風送^(注72)悠揚^(注73)、故^(注74)悲^(注75)而似^(注76)語^(注77)。而自語^(注78)ハ亦見^(注79)萬籟無^(注80)聲^(注81)、惟聞^(注82)角^(注83)矣。好^(注84)誰^(注85)看^(注86)ハ奇句法也。城中皆已^(注87)睡^(注88)熟^(注89)、月色雖^(注90)好^(注91)、憂^(注92)有^(注93)誰^(注94)如^(注95)我^(注96)之不^(注97)寐^(注98)而對^(注99)清光^(注100)者^(注101)。總^(注102)レ^(注103)之^(注104)此老不^(注105)爲^(注106)律^(注107)所^(注108)束縛^(注109)、出^(注110)神^(注111)入^(注112)化^(注113)、非^(注114)贊歎^(注115)ノ可^(注116)レ^(注117)盡^(注118)。

(注6) 宇都宮遷庵の詳説に「悲好ノ二字上へ連テ読五字二字ノ格也」と。

但し、釈大典『杜律發揮』は「詳註按^(注119)ニ杜臆^(注120)悲自語^(注121)・好誰看^(注122)、下三字連統^(注123)。悲ノ字好ノ字作^(注124)活字^(注125)用^(注126)。測旨^(注127)將^(注128)角聲悲・月色好ヲ連統^(注129)、於^(注130)下ノ兩字^(注131)未^(注132)妥^(注133)」という。『杜臆』は明・王嗣爽の著。『測旨』は同じく趙大綱『杜律測旨』のこと。いずれも仇兆鰲の詳註(卷十四)に引く。また鈴木虎雄『杜少陵詩集』(卷十四)は「角聲悲・月色好・として悲・好を上語に属せしめてみる説あるも今従はず」とし、「好は感投詞のごとく『まあ』のごとし」とみる。したがって「悲自語」の主体は杜甫自身とみて、「夜永の角笛をききながら自分は悲みながらひとりごとする」と解する。森槐南『杜詩講義』にも「自語と申しますのは是が角声が語ると云ふのでは無い、角声の悲を聞く毎に自ら独語するのであります」

と説いている。

(注7) 訳注稿(六)、031「野老」詩の詳解に「角は一名唳囉。(中略)軍中警嚴の音」と。

(注8) 釈大典『詩語解』卷上、自の条に「故園花自^(注134)発^(注135)」、「它鄉鶯自^(注136)啼^(注137)」(徐禎卿)、「天涯風俗自^(注138)相親^(注139)」、「五陵衣馬自^(注140)輕肥^(注141)」の句例を挙げて、「有^(注142)在^(注143)彼^(注144)而不^(注145)關^(注146)我^(注147)之^(注148)意^(注149)」と。故園云々は、杜甫「弟を憶ふ二首」其二(詳註卷六)の第五句。天涯云々は、118「冬至」詩の第四句。五陵云々は、095「秋興八首」其三の第八句。095の詳解にも「自の字、彼に在りて我に關せざるの意有り」と。

(注9) 『唐詩貫珠』に「第三は幕府夜宿の苦況を極尽す」と。

(注10) 『唐詩貫珠』に「悲しんで自ら語る」は、奇情なり。風送つて悠揚たり、故に悲んで語るに似たり。而して「自ら語る」は、亦た万籟声無くして、惟だ角を聞くを見はず。「好きも誰か看ん」は、奇句法なり。正に挽きて江城中に至る、皆已に睡熟し、月色好しと雖も、更に誰か我の寐ねずして清光に対する如き者有らんや。之を総ふるに此の老、律の為に束縛せられず、神を出で化に入る、贊歎の尽くす可きに非ず」と。「出神入化」は、絶妙の域に到達する意。明清時代の成語。超神入化、出神入妙も同義。

上五下二の句法。《角》は、とりもなおさず唳囉。軍中で警戒する時の音。《自》の字には、あちらに在つてこちらには関係しないという意がある。《中天月色》は、月が天空の中心に至ること。《自ら語る》《誰か看ん》は、《独宿》を承けて言う。時に吐蕃に備え、《永夜》に《角声》が絶えず、あちらこちらで応酬唱和して、悲しんで語りあっているかのようだ。すべてのざわめきが消え物音ひとつせず静まりかえつたなかで、この高く澄んだ切ない《声》を伝え、眠られずにこれを聞くと、心を傷ませる。《月》は《中天》に至つて、皎皎として昼のようであるのに、一緒に《看》る人としていない。すばらしいとはいえ、何になろうか。いずれも感情のないものを感情あるものとしており、《幕府》に《独宿》する辛い状況をこの上なく写し切っている。胡燮亭が云う、「悲しんで自ら語る」は、奇抜な感情

である。風が悠揚たる音色を送り届け、それゆえ悲しんで語っているかのようだ。そして〈自ら語る〉は、やはり万籟声なく、ただ〈角〉を聞くのみであることをあらわす。〈好きも誰か看ん〉は、奇抜な句法である。城中がすっかり熟睡し、月色がすばらしいとはいえず、このうへ誰か自分のように寝つかれず清らかな光に向き合っている者がいようか。総じてこの翁は詩律に束縛されず、絶妙の域に達しており、いくら賛嘆しても賛嘆し尽せるものではない」と。

風塵在苒^{トシテ} 音書絶^ヘ 關塞蕭條^シ 行路難^シ

※在苒^{トシテ}：ヒキツドヒテ 蕭条^シ：サビレハテ、

此因不能寐^{コト} 牽引^シ 出心事^ヲ。兵戈路梗^ニ、家郷久無^ニ書

信、不知^ニ弟妹生死何如^ヲ、身^ハ滯^ニ邊州^ニ、關塞艱難^ニ、無^ニ同^ニ京

之期^一。恐^{クハ}終^ニ爲^ニ異郷之鬼^ト。豈可^レ不^レ悲哉。在苒猶^ニ侵尋^ノ也。

謂^ニ自^ニ祿山反^{シテ}、禍亂不^レ絶也。

(注11) 『唐詩貫珠』に「下半首は皆寐ぬること能はざるに因つて、心事を牽引し出だす」と。

(注12) 杜甫の弟妹については、訳注稿(五)、024「別れを恨む」詩の(注20)参照。

(注13) この言い方、訳注稿(六)、037「韓十四江東に省親するを送る」詩の詳解にも見えたが、あまり古い用例は見い出せず、明・馮夢龍のいわゆる三言の一つ『醒世恒言』の巻十七「張孝基陳留認舅」(張孝基、陳留にて舅を認む)に、「若し妹丈(妹の婿殿)の我が性命を救ふに非ざれば、必ず異郷の鬼と作らん矣」とある。

(注14) 邵宝『集註』(卷二十二、宮室類) および薛益『分類』(卷一、省宇)に「在苒は、侵尋なり」と。『集註』は宇都宮遷庵の増広本にも挙げる。

〈侵尋〉は、次第に進む意。
ここは寝つかれないことによって、心中の思いを牽き出している。兵乱で道路が塞がり、家郷からは久しく書信がなく、弟や妹の生死がどうなっているやら分からない。我が身は辺境の州にぐずぐずと滞り、〈関塞〉は艱難で、京にもどれるあてがない。恐らくしま

には異郷で野垂れ死にの亡者となりはててしまふだろう。どうしても悲しまずにおれようか。〈在苒〉は、侵尋とほぼ同じ。安祿山が反してより、禍乱が絶えないのをいうのである。

已^ニ忍^ニ伶俚十年ノ事^一 強^ニ移^ニ棲息^ニ一枝ノ安^一

※伶俚^ハ：シドロモドロ 棲息^ハ：スマヒ

伶俚^ハ行^ハ不^レ正^{カラ}之貌^ヲ。因^テ謂^ニ零落之狀^一。公自^ニ棄^ニ官^ニ至^ニ是^ニ、

正^ニ六年矣^一。十年ハ舉^ニ大數^ヲ耳。移^ハ謂^ニ出^ニ草堂^ニ依^ニ幕府^ニ也。莊

子^ニ鶴鶴巢^ニ林^ニ不^レ過^ニ一枝^一。歸^ニ去^ニ來^ニ辭^ニ審^ニ容^ニ膝^ニ之易^ニ安^一。

安^ハ字本^ニレツク此^一。公爲^ニ幕官^ト、素非^ニ其志^一。自^ニ顧^ニ亂離奔走之苦^一、

已^ニ忍^ニ其所^ニ不^レ堪多矣^一。乃^ニ強^ニ就^ニ幕府之官^ニ、聊^ニ偷^ニ一枝之安^一已。

以^ニ已^ニ忍^ニ而強^ニ移^ニ、不^レ得^ニ已^一之辭^一。以^ニ猶^ニ爲^ニ此善^ニ於彼^ニ、亦

強^ニ而忍^ニ之耳^一。明年正月所^ニ以^ニ辭^ニ職^一也。此詩對起對結^ニシテ、而

氣自^ニ流走^ニ、妙。

(注15) 邵宝『集註』および薛益『分類』に「伶俚は、行くこと正しからざる貌」と。『唐詩貫珠』も同様。これは「広韻」下平声十五青に「伶俚、行くこと正しからず。亦た伶俚に作る」とあるのによる。量韻の語。『集註』は宇都宮遷庵の増広本にも挙げるが、「正」字を「止」に誤る。

(注16) 乾元二年(七五九)、華州司功參軍の官を放棄したことを指す。

(注17) 陳廷敬『杜律詩話』(卷下)に「伶俚十年の事、自ら当に乱離奔走を指すべし。已亥(乾元二年)官を棄てて自り甲辰(広徳元年)に参謀たるに至つて、僅かに是れ六年、十年とは大数を挙ぐる耳」と。

(注18) 邵宝『集註』に「一枝の安は、莊子に鶴鶴棲む所、一枝に過ぎず、薛益『分類』に「一枝は、莊子に鶴鶴深林に巢くふ、一枝に過ぎず」と。

『集註』は宇都宮遷庵の増広本にも挙げる。『莊子』逍遙遊篇に「鶴鶴は深林に巢くふも、一枝に過ぎず」と。鶴鶴は、ミソサザイ。

(注19) 晋宋末初の陶淵明「帰去來の辞」(『文選』卷四十五／『古文真宝』後集卷一)に「膝を容るるの安んじ易きを審らかにす」と。

(注20) 『唐詩貫珠』に「此の詩、対起対結にして、而して氣自^ニ流走^ニ、妙」と。

〈伶俚〉は、行くこと正しくないさま。そこから零落のありさまを

いう。公は官を棄ててからこれまで、ちょうど六年になる。（十年）は、だいたいの数を挙げたのだ。（移る）は、草堂を出て（幕府）に身を寄せることである。『莊子』に「鷦鷯、林に巢くふこと一枝に過ぎず」と。「帰去来の辞」に「膝を容るるの安んじ易きを審らかにす」と。（安）の字は、これにもとづく。公が幕官となったのは、もとよりその志ではない。自らふりかえるに乱離奔走の苦しみは、これまで堪えられないことをじつと（忍）えてきたことが多かった。そこで（強いて）幕府の官に就き、いささか（一枝の安）を偷んだのだ。（已に忍ぶ）をもつて（強いて移る）のは、やむを得ざるの辞。まだこちらの方がそれよりましだと思つて、やはり（強いて）これに（忍）えているのだ。明年（永泰元年、七六五）正月、職を辞することになるゆえである。この詩は、対偶で言い起こし対偶で結んでいるが、氣は拘束されることなく自然に流走し、絶妙だ。

065 院中晩晴懷西郭茅舎

※院：ヤクシヨ

説文院ハ垣也。増韻室有垣牆者爲院ト。西郭茅舎即浣花草堂。公在參謀院中、因晩晴佳景、想西郭幽居。自恨失逍遙之樂、而嘆羈絆之爲俗。蓋亦有不樂於幕府者也。

（注1）『説文解字』十四篇下には「院、堅なり」と。ここは、「広雅」釈宮に「院は垣なり」というのと混同したか。

（注2）『増韻』は、「増修互註礼部韻略」のこと。その去声線韻に「広韻に垣院。庭館に垣牆有る者を院と曰ふ」と。

『説文』に「院は垣なり」、「増韻」に「室に垣牆有る者を院と爲す」と。（西郭の茅舎）は、ほかならぬ浣花草堂。公は参謀の（院中）にあり、（晩晴）の佳景によつて、西郭の幽居を想起している。のんびりと逍遙する樂しみを失つたことを自ら恨み、官職に繋がれている身の俗っぽくなったことを嘆じている。けだしやはり（幕府）でお

もしろくないことがあったのだろう。

幕府秋風日夜清 澹雲疎雨過高城

※清：スンスリ 疎：ハラ／＼

日夜清ハ秋暑始退涼氣大生也。次句緊承風字。過者去而不留也。澹雲疎雨、故易散而乍晴。霏霏向城頭而來、瞥然隨風過去也。燮亭云、日夜清三字、大方老氣。高城二字、最有精神。用實字而警拔、此公之筆力。

（注3）邵宝『集註』（卷二十二、宮室類）および薛益『分類』（卷一、省字）に「淡雲疎雨、故に散じ易くして晩に晴れん」と。『分類』は宇都宮遷庵の増広本に、「集註」は詳説に挙げる。

（注4）『唐詩貫珠』（卷五十、秋）に「日夜清の三字、大方の老氣」と。また「高城の二字、精神有り。実字を用いて警拔、老杜の筆法」と。大方は、大家。老氣は、老練な氣象。精神は、活き活きとした力。氣力。実字は、この場合、名詞・動詞・形容詞をいう。

（日夜清し）は、秋初の暑さがやつと退いて涼氣が大いに生ずるのである。次の句は、びたつと（風）字を承ける。（過）とは、去つて留まらないことである。（澹雲）（疎雨）は、もとより散じやすくてたちまち晴れる。ばあつと立ちこめて城壁の上にやつて来て、あつという間に風に随つて過ぎ去るのである。胡燮亭が云う、「（日夜清）の三字は、大家の老練な氣象。（高城）の二字は、最も氣力が漲つてゐる。実字を用いて警拔であり、これぞ公の筆力だ」と。

葉心朱實堪三時落 階面青苔先自生

葉心ハ猶言葉裏ト。朱實ハ赤果也。已ニ熟シテ而欲落ト也。見ニ雨痕淋漓。公小園詩「秋庭風落果、王維詩雨中山果落、亦皆此景也。階ハ應是石階或土階。故ニ青苔因潤而生。于雨痕無物トテ

不潤之中、青苔最先占之、故曰「先自生」ト。然因疎雨乍過、俄能上階來乎。但無雨則色枯似無、得潤則頓發青色。若新生然也。

（注5）（堪）字、錢注（卷十三）及び輯註（卷十二）は（看）に作り、「二に

堪に作る」と注する。なお邵傳『集解』は、〈堪〉字の下に「不堪」と注し、本文を「堪へんや」と反語に解する。

(注6) 薛益『分類』に「朱実は、赤果なり」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

(注7) 大暦二年(七六七)作の「小園」詩(詳註巻二十)に、次のように詠じられている。

由來巫峽水

由來巫峽の水

本是楚人家

本と是れ楚人の家

客病留因藥

客病 留まるは薬に因り

春深買爲花

春深 買ふは花の爲なり

秋庭風落果

秋庭 風 果を落とし

瀼岸雨頽沙

瀼岸 雨 沙を頽す

問俗營寒事

俗に問いて寒事を営み

將詩待物華

詩を待て物華を待つ

(注8) 盛唐・王維「秋夜独坐」詩(『王右丞集』巻九/『三体詩』巻三)に、次のように詠じられている。

獨坐悲雙鬢

独り坐して双鬢を悲しむ

空堂欲二更

空堂 二更ならんと欲す

雨中山果落

雨中 山果落ち

燈下草蟲鳴

燈下 草虫鳴く

白髮終難變

白髮 終に變じ難く

黃金不可成

黃金 成す可からず

欲知除老病

老病を除くことを知らんと欲せば

惟有學無生

惟だ無生を學ぶ有り

(注9) 釈大典『杜律發揮』に「苔豈因雨俄生乎。但無雨則苔枯。似無雨則發青色」と。

〈葉心〉は、葉裏と言うのとほぼ同じ。〈朱実〉は、赤い果実である。もうすっかり熟して落ちそうなのである。雨痕でしっとり濡れているのをあらわす。公の「小園」詩に「秋庭風果を落す」、王維の詩に「雨中山果落つ」とあるのも、やはりみなこの情景である。〈階〉は、きつと石の階段か土の階段であるにちがいない。それゆえ〈青苔〉

が潤いによって生じる。雨痕が潤わさぬものがないなかで、〈青苔〉が最も先にこれを独り占めする。それゆえ〈先づ自ら生ず〉という。されど〈疎雨〉がさつと通り過ぎたからといって、にわかに〈階〉に上つて来ようか。しかし雨がなければ色枯れてそこにないようにみえるが、潤えばたちまち鮮やかな〈青〉色を発する。新たに〈生〉じたかのようである。

復有樓臺街暮景 不勞鐘鼓報新晴

※不勞：オセワハカケヌ

此聯寫出晚晴性情。復(注10)再也。雲去而日光再照也。街(注11)者謂夕照半殘似半吞半吐之狀。蓋樓臺之間、夕陽倒射、處處若相銜也。不勞猶不須也。二句一串、院中晚晴活畫。凡

鐘鼓聲亮可(注12)以知新晴。今既見樓臺之間斜景煥然(注13)則不須鐘鼓之報而知其晴矣。燮亭云、銜字描出晚晴之神。日勞日報、寫得鐘鼓有生動之致。

(注10) 釈大典『詩語解』巻上、復の条に「字彙に復(重)也再也」と。

(注11) 『唐詩貫珠』に「銜は蓋し全樓台に晚照有るに非ず。是れ半辺の夕陽、半吞半吐の像に似たり。所以に之を銜と謂ふ」と。

(注12) ちなみに、釈大典『詩語解』巻下に、不用・不須・不勞等の語を挙げ、「此亦語意粗同、故茲条列」と。

(注13) 邵傳『集解』に「鐘鼓声亮なるときは則ち晴る。蓋し俗占なり」と。また『唐詩貫珠』に「凡そ鐘鼓声高ければ、以て晴明を知る可し。今既に斜景煥然たる有り、已に晚晴を驗す、則ち必ずしも復た鐘鼓を聴かざる耳」と。驗は、驗の俗字。

(注14) 『唐詩貫珠』に、(注11)に挙げた箇所に続けて「而して晚晴の神、一字に于いて描出す」と。また(注13)に挙げた箇所に続けて「乃ち勞と日ひ報と曰ふ、写し得て鐘鼓生動の致有り」と。

この一聯は、〈晚晴〉本来の趣を写し出している。〈復〉は、再である。雲が去って日光が再び照らすのである。〈銜〉は、夕照が半ば残って半吞半吐のありさまであるようなこと。けだし〈樓台〉の間

に夕陽が斜めに射し、いたるところ（銜）むがごとくである。（勞せず）は、須いずとほぼ同じ。二句ひとつらなりで、〈院中晚晴〉の活きた画だ。すべて〈鐘鼓〉が高らかに響きわたれば〈新晴〉を知ることができる。今すでに〈楼台〉の間に、西に傾いた陽光がざらざらと輝いているのをみれば、〈鐘鼓〉の報を待たずしてその晴れたのが分かるのだ。胡燮亭が云う、「銜」字は、〈晚晴〉の神髓を描き出しており、〈勞〉といい〈報〉というのは、〈鐘鼓〉に生き生きとした趣があるの写し得ている」と。

浣花谿裏花饒笑

官信兼吏隱

名

上六句院中晚晴、結乃懷西郭茅舍。饒從也。言從爲花神所笑也。暗與不勞通神。竝以滑稽一行。吏隱吏ニシテ而兼隱者。汝南先賢傳鄭欽吏隱于蟻坡之陽。以漁釣自娛。是乃身爲吏而居兼隱者之樂。公則心雖兼隱、然不能如鄭。偶因院中晚晴之好、感而懷西郭茅舍。

浣花谿上秋花應盛。晚晴幽致、想像神馳。而身羈絆府中、不得往玩。其景。竟是一俗吏、徒令好花寂寞。從其笑我耳。但我雖在官、而心在於野、非下眞爲俗吏。沾沾自喜者。然谿上之花、恐不諒吾衷。故曰官信。自恨心跡不能并。託花言懷也。蓋公在蜀兩依嚴武。其於公、故舊之情、不可謂不厚。及居幕中、未免以下禮數相拘。其務甚勞苦、晨入夜歸、非有疾病事故、輒不許出。故公不屑爲之。公遣悶二十韻呈嚴公云、胡爲來幕下、只合在舟中。束縛酬知己、蹉跎効小忠。周防期稍稍、太簡遂忽忽。曉入朱扉啟、昏歸畫角終。不成尋別業、未敢息微躬。會希全物色、時放倚梧桐。其幽鬱可知矣。此公所不堪其束縛、眷戀浣花幽居也。案二年譜、廣德二年六月爲幕府參謀、明年正月辭職歸草堂、爲幕

官僅二八閱月耳。

〔注15〕 ちなみに、顧宸『註解』に「旧註俱に云ふ、上の六句は院中の晚晴、末の二句は方に西郭の茅舍を懷ふと。余謂へらく非なり。止だ上の二句は院中を説く。下の六句は全く是れ西郭の茅舍を懷ふ」と。宇都宮逖庵の増広本にも挙げる。

〔注16〕 釈大典『文語解』卷四に「儘・饒・任・從・信・聽」を「ママ。マカス」と訓ずる。なお、邵傳『集解』に「応に多く我が逐逐たる吏情を笑ふべし」と解し、鈴木虎雄『杜少陵詩集』（卷十四）は「饒笑」を「饒く笑ふ」と訓じて、「饒は多きこと」という。

〔注17〕 通神、ここでは氣脈を通ずる意。

〔注18〕 『汝南先賢伝』は、三国魏・周斐撰。もと宋・趙次公の注に挙げる。但し、『藝文類聚』卷九、水部下、陂および『太平御覧』卷七十一、地部、陂に引く「汝南先賢伝」には、吏字の上に去字がある。それに従えば、「鄭敬、吏を去り蟻坡の陽に隱居し、魚釣を以て自ら娛しむ」となり、「吏隱」の典故として挙げるのはふさわしくない。なお、「吏隱」の語の早い用例は、初唐の宋之間「藍田山莊」詩（『全唐詩』卷五二）の「吏遊は吏隱に非ず」の句である。このこと、赤井益久「中唐における『吏隱』について」（『国学院中国学会報』第三十九集、一九九三年。後に『中唐詩壇の研究』所収。創文社、二〇〇四年）、川合康三「宦遊と吏隱」（『中国説書人の政治と文学』所収。創文社、二〇〇三年）参照。

〔注19〕 沾沾は、鼻高々に得意がるさま。「史記」魏其武安列伝に「魏其なる者は沾沾自ら喜ぶ耳」とあり、裴駰の集解に引く張晏の注に「沾沾は、自ら整頓するを言ふなり」として外面を整える意とするが、顔師古は輕薄と解する。

〔注20〕 ちなみに、鈴木虎雄『杜少陵詩集』は「肯信」の語釈に「反語なり、不信とおなじ意。旧解に『信』の主語を上句の『花』とせり、余はしか考へず、略されたる『我』の字なりとおもふ。我不信とは言ひ換ふれば我自疑ふといふことなり」と説く。

〔注21〕 広德二年（七六四）の作「悶を遣らんとて嚴公に呈し奉る二十韻」詩（詳註卷十四）に、次のように詠じられている。

白水魚竿客 清秋鶴髮翁
白水魚竿の客、清秋鶴髮の翁
胡爲來幕下 祇合在舟中
胡爲れぞ幕下に來たる、祇だ合に舟中

黄卷眞如律 青袍也自公

に在るべきに
黄卷は真に律の如し、青袍も也た公自
りす

老妻憂坐痺 幼女問頭痛
平地事欲倒 分曹失異同
禮甘衰力就 義忝上官通

老妻は坐痺を憂ひ、幼女は頭痛を問ふ
平地 専ら欲倒す、分曹 異同に失す
礼は衰力就くを甘んじ、義は上官の通
ずるを忝うす

疇昔論詩早 光輝仗鉞雄

疇昔 詩を論ずること早く、光輝仗鉞
雄なり

寛容存性拙 剪拂念窮途
露裊思藤架 煙霏想桂叢
信然龜觸網 直作鳥窺籠

寛容 性拙を存す、剪払 窮途を念ふ
露裊 藤架を思ひ、煙霏 桂叢を想ふ
信然 龜網に触る 直ちに鳥の籠を窺う
を作す

西嶺紆邨北 南江繞舍東
竹皮塞舊翠 椒實雨新紅

西嶺 村北に紆り、南江 舍東に繞る
竹皮 旧翠塞く、椒実 雨新たに紅な
り

浪簸船應坼 杯乾甕即空

浪に簸られて船底に坼くなるべし、杯
乾きて甕即ち空し

藩籬生野徑 斤斧任樵童
束縛酬知己 蹉跎効小忠

藩籬 野徑生ず、斤斧 樵童に任す
束縛せられて知己に酬い、蹉跎として
小忠を効す

周防期稍稍 太簡遂忽忽

周防 期すこと稍稍、太簡遂に忽忽た
り

曉入朱扉啓 昏歸畫角終

曉に入つて朱扉啓く、昏に歸りて画角
終る

不成尋別業 未敢息微躬

別業を尋ぬるを成さずんば、未だ敢へ
て微躬を息はしめず

鳥鵲愁銀漢 驚駘怕錦幃
會希全物色 時放倚梧桐

鳥鵲 銀漢を愁へ、驚駘 錦幃を怕る
會ず希ふ物色を全うして、時に放ちて
梧桐に倚らしめんことを

(注22) 宇都宮遷庵の増広本に挙げる明・単復の年譜。
上の六句は、〈院中の晩晴〉。結びでやっと〈西郭の茅舍を懷ふ〉の

である。〈饒〉は、従である。その意味は、〈花〉の精に〈笑〉われ
るのに従せるのである。暗に〈勞せず〉と氣脈を通ずる。ともに諧
諷をもつて言いなししている。〈吏隱〉は、官吏にして隱者を兼ねる者。
『汝南先賢伝』に「鄭欽は蟻坡の陽に吏隱し、魚釣りして自ら娛し
んだ」と。これこそその身は官吏となつて住まいは隱者の楽しみを
兼ねているのだが、公はといえば心は隱者を兼ねているとはいへ、
されど鄭欽のようににはできない。たまたま〈院中の晩晴〉のすばら
しさによつて、心感じて〈西郭の茅舍を懷ふ〉のである。〈浣花〉の
〈谿〉のほとりでは秋の〈花〉がきつと盛りであろう。〈晩晴〉の奥
深い趣をば想像して心を馳せるものの、身は役所内にしづりつけら
れ、赴いてその景色を賞玩することができない。とどのつまり一介
の俗吏であつて、すばらしい〈花〉にひっそりと咲くだけ咲かせて、
そいつが自分を〈笑〉うにまかすのだ。ただ自分は官にあるとはい
え、心は野にあり、ほんとうに俗吏となつて、鼻高々に自ら喜ぶ者
ではない。されど〈谿〉のほとりの〈花〉は、恐らく己れの真情を
もつともだとはみなしてくれないだろう、それゆえ〈肯へて信ぜん
や〉という。思いと行動とを一致させることができないのを自ら恨
み、〈花〉に託して胸の内を言うのである。けだし公は蜀にあつて再
度嚴武に頼つた。彼が公に対すること、古なじみとしての友情は、
厚くないとは到底いえないが、幕中に居るとなると、札数をもつて
拘束されることを免れず、その職務ははなはだしんどくて、朝早く
役所に入り夜晩く帰り、疾病や事故でなければ、外出を許されない。
それゆえ公はこれをなすことをいさぎよしとしないのだ。公の「悶
を遣る二十韻、嚴公に呈す」詩に云う、「胡為れぞ幕下に来れる、只
だ合に舟中に在るべきに。(中略)束縛せられて知己に酬い、蹉跎と
して小忠を効す。周防期稍稍、太簡遂に忽忽たり。曉に入つて朱扉
啓く、昏に帰れば画角終る。別業を尋ぬるを成さずんば、未だ敢へ
て微躬を息せしめず。(中略)会たま物色を全うせんことを希ふ、時

に放ちて桐に倚る」と。その幽鬱ぶりがわかる。これぞ公がその東縛に我慢がならず、〈浣花〉の幽居を眷恋するゆえんである。年譜を案ずるに、広徳二年（七六四）六月、幕府の参謀となり、明年（永泰元年、七六五）正月、職を辞して草堂に帰った。幕官となったのはわずかに八ヶ月だけだったのである。

066 奉寄高常侍

廣徳二年、高適自蜀召還、爲刑部侍郎左散騎常侍。公自成都寄之京師也。常侍屬門下省、掌規諷過失侍從顧問。^(注2)

問上。

〔注1〕『旧唐書』卷一一一、高適伝に「代宗即位するや、吐蕃隴右を陥れ、漸く京畿に逼る。（高）適、兵を蜀に練し、吐蕃の南境に臨みて以て之を牽制す。師出でて功無く、而して松・維等の州、尋いで蕃兵の陥る所と爲る。代宗、黃門侍郎の嚴武を以て代ふ。還りて用いられて刑部侍郎と爲り、散騎常侍に転ず」と。刑部侍郎は、尚書刑部の次官で、正四品下。左散騎常侍は、門下省に属し、正四品上。なお、高適については、訳注稿一「杜文貞公伝」の（注57）も参照。

〔注2〕『新唐書』百官志に「門下省左散騎常侍二人、過失を規諷し侍從顧問を掌る」と。輯註（卷十一）に挙げ、宇都宮遷庵の増広本に引く。

広徳二年（七六四）、高適は蜀より召還され、刑部侍郎・左散騎常侍となった。公は成都からこの詩を京師に寄せたのである。〈常侍〉は、門下省に属し、天子の過失を規諷し侍從顧問を掌る。

汶水相逢年頗多

飛騰無那故人何上トモスルコト

※頗：ヨホド

汶水ノ名。出泰山ノ萊蕪^(注4)。明時山東ノ汶水縣。汶上ハ用論語^(注5)語。此追言初相逢時^(注6)。天寶四載、公在齊州^(注7)、與李白高適^(注8)交遊。去今正二十年、故曰年頗多^(注9)。言尤爲^(注10)故舊也。那奈也。六朝人多ク以奈爲^(注11)那。唐人沿之。故人ハ公自謂。無那^(注12)故人^(注13)何上トモスルコト。公自傷屯蹇^(注14)也。公與高二十年來ノ舊友。

又嘗竝拜拾遺爲同僚^(注15)。後高歷刺史節度使、今爲常侍^(注16)。飛騰誠貴^(注17)。公、則流落不遇、僅爲成都幕僚^(注18)。故賀^(注19)高而自傷^(注20)也。

〔注3〕 積大典『詩語解』卷下、頗の条に「汶水相逢^(注21)年頗多^(注22)。多有之頗也」とあり、句例の〈頗〉に「ヨホド」と左訓を施す。

〔注4〕 輯註に「漢書」地理志を引き「汶水は泰山郡萊蕪縣より出づ」と。宇都宮遷庵の増広本にも挙げる。

〔注5〕 薛益『分類』（卷二、簡寄）に「汶は水の名。即ち今の山東の汶水県」と。宇都宮遷庵の増広本にも挙げる。

〔注6〕 『論語』雍也篇に「季氏、閔子騫をして費の宰^(注23)爲らしむ。閔子騫曰く、我が爲に辞せよ。如し我を復する者有らば、則ち吾れは必ず汶上に在らん矣」と。

〔注7〕 齊州は、今の山東省済南市。李白・高適との交遊については、大暦元年（七六六）、夔州での作「昔遊」詩（詳註卷十六）の冒頭に、

昔者與高李 昔 高・李と

晚登單父臺 晩に單父の台に登る

と詠じられ、同じく「懷を遣る」詩（詳註卷十六）にも、「昔我れ宋中に遊ぶ」と歌い起こして、

憶與高李輩 憶ふ高・李が輩と

論交入酒壚 交はりを論じて酒壚に入る

兩公壯藻思 兩公 藻思壯んにして

得我色敷腴 我を得て色敷腴たり

と回想している。敷腴は喜悅のさま。疊韻の語。

三人が行動を共にしたのは、天寶三載（七四四）の秋、宋州の地に於いてのこととするのが通説である。これに対して、鄭健行「杜甫・高適、李白梁宋之游疑于開元二十五、六年説」（『杜甫研究學刊』、二〇〇一年第二期）では、開元二十五、六（七三七、八）年説を唱えている。

〔注8〕 ちなみに、積大典『文語解』卷上に那字について「又奈ノ字ニ通ス」と。

〔注9〕 清の顧炎武『日知録』卷三十二、奈何の条に「六朝の人、多く奈を書して那と爲す」として、その例を示し、「唐人の詩、無奈を以て無那と爲す」と。仇兆鰲の詳註（卷十三）にも挙げる。

(注10) ちなみに、鈴木虎雄『杜少陵詩集』は「故人は旧知の友、適をさす」とする。

(注11) 屯も蹇も、易の卦の名で、ゆきなやむ意。

(注12) 高適は、天寶十四載（七五五）十二月に、左拾遺に拝せられたが、すぐに監察御史に転じており、杜甫と同じ時期に同僚として務めたことはない。

(注13) 顧宸『註解』に「又た（高）適と同じく拾遺を拝す。今に至って適遂に刑部尚書・散騎常侍と為る、則ち其の飛騰亦た極まりぬ矣。公自ら僣蹇を傷むなり」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。飛騰は、一気に榮達すること。

ちなみに、鈴木虎雄『杜少陵詩集』は「飛騰」について「元氣潑瀾たること。（中略）飛騰を陞任の意とく説あり、取らず」とする。

〈汶〉は、水の名。泰山の萊蕪から出る。明代では山東の汶水県。

〈汶上〉は、『論語』の語を用いる。これは初めて出逢った時のことを追憶して言う。天寶四載（七四五）、公は齊州で李白・高適と交遊した。今からちょうど二十年前である。それゆえ〈年頗る多し〉という。とりわけ古なじみであることを言うのである。〈那〉は、奈である。六朝人は多く奈を那とし、唐人はこれを沿襲した。〈故人〉は、公自らの謂。〈故人を那何ともすること無し〉は、公自ら屯蹇を傷むのである。公は高適と二十年來の旧友で、そのうえかつてともに拾遺に任命され同僚となったことがある。後に高適は刺史や節度使を歴任し、今では〈常侍〉の身の上である。〈飛騰〉してまことに高貴となっている。公はといえば流落不遇の身で、やっと成都の幕僚にありつた。それゆえ高適を慶賀して自ら傷むのである。

總戎^{タルコト}楚蜀^二應^三全^{ナル}末^一 方^テ駕^ヲ曹劉^二不^三啻^{ナル}過^一

※応^二：デアラン^一 不啻^二：ダンデハナイ^一

總戎^{注16}見^レ前^一。高先^{注17}除^二揚州^一、大都督淮南節度使^二、後爲^三彭蜀二州^一刺史西川^{注18}節度使^一。故^二曰^一總戎^二楚蜀^一。應^二全^一末^一言^レ未^レ足^三以^二盡^一其^二所能^一也。方^レ駕^ハ竝^ヘ駕^ヲ爭^ニ馳^ス。與^二方^一舟^二之^一方^一同^一。曹

劉^ハ曹子建劉公幹、建安七子中之秀。文選廣絶交論^{注19}適文麗藻方^二駕^一曹王^二。鍾嶸詩品^{注20}曹劉^一文章之聖。此湊^二合^一之^一。不^二啻^一過^一。言^レ不^レ足^二竝^一馳^ニ也。二句稱^二文武具美^一。所^二以^一飛騰^一也。超過^ハ去聲。今押^二平聲^一。蓋亦通用^{スル}也。

(注14) ちなみに、釈大典『詩語解』卷下、応の条に「料度の辞」として、盛唐・孫逖の五絶「洛陽の李少府と共に永樂公主の蕃に入るを觀る」詩の

結句「龍塞始^レ應^レ春^ル」を例に挙げ、〈応〉に「デアラウ」と左訓を施す。

(注15) 釈大典『詩語解』卷上、不啻の条に挙げる句例に「方^二駕^一曹劉^一不^レ翅^一過^一」と訓じ、〈不翅〉に「ダンデハナイ」と左訓を施す。なお、

〈啻〉を〈翅〉に作るのは、同音で同義の故に誤ったものであろう。ちなみに、同じく釈大典『文語解』卷三、啻の条には「不啻ハソノダンデハナシノ意ナリ。（中略）又通^レ作^レ翅^ニ」と。

(注16) 訳注稿(ハ)、061「將に成都の草堂に赴かんとして途中作有り先づ嚴鄭公に寄す」詩五首其五の詳解に「唐、節度使を以て総戎と爲す。猶ほ將軍と言ふがごとし」と。

(注17) 顧宸『註解』に「（高）適、先に揚州の大都督、淮南節度使に除せられ、又た出でて彭蜀二州の刺史と爲る」と。宇都宮遯庵の増広本も挙げる。高適が淮南節度使となったのは、至徳元載（七五六）のことで、至徳三載（七五八）に太子詹事、乾元二年（七五九）に彭州刺史、翌三年（上元元年）に蜀州刺史に移り、宝應二年（七六三）二月、劍南節度使となった。

(注18) 『集千家註』（卷十二）に「修可曰く、駕^ヲ方^ハは、駕^ヲ並^ニぶなり。方舟の方と同じ」。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

なお、修可（杜修可）について、蔡錦芳『杜詩版本及作品研究』（上海大学出版社、二〇〇七年）の上編第五章に拠れば、かかる人物は実在せず、その注というのは杜田と趙次公およびその他の注を混ぜ合わせたものとする。

(注19) 後漢の建安年間（一九六―二一九）に活躍した文学者、孔融（字は文舉）・陳琳（孔璋）・王粲（仲宣）・徐幹（偉長）・阮瑀（元瑜）・応瑒（徳璉）・劉楨（公幹）の七人を指す。曹植（子建）を含め、それぞれの伝の訳注が興膳宏編『六朝詩人傳』にある。

〔注20〕『文選』卷五十五、南朝梁・劉峻（字は孝標）の「広絶交論」に「適文麗藻、駕を曹・王に方ぶ」と。次の「詩品」とともに輯註に挙げる。但し、鍾嶸詩評に作る。

〔注21〕南朝梁・鍾嶸「詩品」下の序に「昔、曹・劉は殆ど文章の聖」と。
〔注22〕過は、平声の場合は、経の意。

〔総戎〕は、前に見える。高適は先に揚州大都督、淮南節度使に除せられ、後に彭・蜀二州の刺史、西川節度使となった。それゆえ（楚蜀に総戎たり）という。（応に全く未だしなるべし）は、いまだその能力を存分に發揮するに足りないことを言う。（方駕）は、駕を並べて争馳すること。方舟の方と同じ。（曹劉）は、曹子建・劉公幹。建安七子中の秀でた者。『文選』の「広絶交論」に「適文麗藻、駕を曹・王に方ならぶ」、鍾嶸「詩品」に「曹・劉は文章の聖」と。ここではこれを一つに合わせる。（害に過ぐるのみならず）は、竝に馳するに足りないことを言うのである。二句は文武具美なるを称する。（飛騰）するゆえんである。超過（の過）は去声。今は平声を押す。けれど、やはり通用するのである。

今日朝廷須汲黯

中原將帥憶廉頗

須用也。汲黯漢ノ直臣。武帝ノ時自ニ東海ノ守ニ入テ爲ニ九卿一、以ニ數ノ直諫スルヲ不レ得レ畱レ内ニ、又出テ爲ニ淮陽ノ守一。黯以レ病辭ス。願下爲ニ郎中一補過拾遺、帝不レ許。居レ淮ニ二十年シテ卒。此翻用之、稱朝廷能用ニ直臣ヲ、故ニ特ニ曰ニ今日ト。昔ハ則不リシ然ラ也。高嘗鎮ニ淮南ヲ、今爲ニ侍從規諫之職ト、所以翻用一也。廉頗趙ノ良將、憶ハ廉頗ヲ去テ後見レ思ハ也。從ニ蜀人ノ憶レ之、故ニ曰ニ中原ノ將帥一。薛益分類ニ引ニ漢武帝ノ語ヲ、誤矣。高爲ニ西川ノ節度使ト、禦ニ吐蕃ヲ無レ功。詔シテ以ニ嚴武ニ代シメ之、高歸朝廷ニ。趙ノ長平之役以ニ趙括ニ代ニ廉頗ニ、故ニ以ニ相比解ニ高之無レ功、所レ謂應ニ全ナル也。廉頗居楚ニ思用ニ趙人ヲ。今日憶廉頗、亦翻用也。

〔注23〕積大典「詩語解」卷下、須の条に「字彙、須、待也、用也」と。同じく卷下、不須の条に「用・須、義同」として、「今日朝廷須汲黯」の句例を挙げる。

〔注24〕邵傳「集解」に「黯は直臣」と。汲黯の伝は、『史記』卷一百二十、『漢書』卷五十五に見える。直臣は、忌憚なく諫言を呈する臣下。その伝に汲黯の語として「禁闕に出入し。過を補ひ遺を拾ふは、臣の願ひなり」と。
〔注25〕邵傳「集解」に「頗は良將」と。廉頗の伝は、『史記』卷八十一に見える。

〔注26〕後漢の何武は、歴任した官職において赫赫たる名声は挙げなかったが、「去りて後常に思はれ」という。「蒙求」卷下に「何武去思」の条がある。

〔注27〕ちなみに、鈴木虎雄『杜少陵詩集』は「憶」字を「作者がおもふなり」と解し、「諸家の解は一般人が憶ふこととす、今従はず」と。

〔注28〕薛益「分類」に「漢書に汲黯、朝に在り、淮陽、謀を寝む。又た召して淮陽の太守と爲す。上の曰く、淮陽の吏民相得ず、吾れ君が重きを得て臥して之を治めんと。淮に居ること十年にして卒す」と。宇都宮逸庵の増広本にも挙げる。

〔注29〕積大典「杜律發揮」に「時高適爲西川節度使、禦吐蕃無功、詔以嚴武代還爲常侍。趙長平之役、以趙括代廉頗、故以相比シテ解高之無レ功」と。紀元前二六〇年、秦の將軍白起が長平に籠城する趙の大軍を破った。解は、弁解、釈明の意。

〔注30〕廉頗は晩年、楚國に招かれ一度は將軍となったが勲功を立てられなかった。わしは趙の人間を使いたい口にしたが、とうとう寿春（當時、楚國の都）で死んだ（『史記』廉頗藺相如伝）。

〔須〕は、用である。〔汲黯〕は、漢代の直言の臣。武帝の時、東海郡の太守から入朝して九卿となり、しばしば直諫したので朝廷内に留まることができなくなり、また外任して淮陽郡の太守となった。汲黯は病氣を理由に辞し、郎中となって天子の落ち度を補い遺漏を拾わんと願ったが、帝は許さなかった。淮に居ること十年にして卒した。ここはこれを翻用（逆用）し、朝廷がよく直言の臣を用いるのを称している。それゆえ特に（今日）という。昔はそうでなかつ

たのである。高適はかつて節度使として淮南を治めたが、今では侍従規諫の職となっており、翻用するゆえんである。〈廉頗〉は、戦国趙の良将。〈廉頗を憶ふ〉は、去った後に思慕されることである。蜀人の側からこれを憶うので、それゆえ〈中原の将帥〉という。薛益『分類』に漢の武帝の語を引くのは、誤まり。高適は西川節度使となったが、吐蕃を禦ぐのに功績がなかった。詔して嚴武に代わらせ、高適は朝廷に帰任した。趙の長平の役では、趙括をして廉頗に代わらせた。それゆえ対比して高適の功なきを釈明しており、いわゆる〈応に全く未だしなるべし〉である。その後、廉頗は楚国に居住して趙の人間を使いたいと思っていた。今、〈廉頗を憶ふ〉というのは、やはり翻用である。

天涯／春色催遲暮³²

別淚遙添錦水ノ波

※催…オツタテル

天涯ハ謂ニ身在僻遠ニ、與レ高懸絶上³¹。遲暮ハ猶云衰老³¹。然トモ本楚辭ノ語。兼テ言ニ拙宦蹉跎³¹。添波謂ニ涙下之多³¹。波ノ字暗ニ承ニ遲暮³¹、含ニ流年之感³¹。此跟ス第二句³¹。高歸レ朝登庸³¹、公獨流落天涯³¹、而不³¹能³¹還³¹。春色原可ニ以娛³¹人³¹、而流光催³¹逐³¹衰暮³¹、徒³¹令³¹人³¹悵恨³¹。公居臨錦水³¹、不³¹覺怨別³¹之淚潺湲³¹、下³¹如³¹雨之落³¹。添波³¹而流也。春色謂³¹時³¹而暗³¹影³¹之飛騰³¹之榮³¹。與³¹己³¹遲暮³¹反映³¹。正³¹無³¹那³¹故人³¹何³¹上³¹也³¹。遙³¹字怨深、吾獨泣³¹于此³¹、而彼³¹不³¹知也。錦水與³¹春色³¹通³¹氣³¹用³¹之³¹。亦可³¹會³¹用字之法³¹。

(注31) 訳注稿(六)、040「野を望む」詩の第五句に「唯だ遲暮を將て多病に供す」とあり、〈遲暮〉に「オイボレ」と左訓を施す。またその詳解に「遲暮は猶ほ老衰と言ふがごとし。楚辭に美人の遲暮を恐ると、是れ其の出処」と。

(注32) 訳注稿(四)、016「許八に因つて江寧の旻上人に奉寄す」詩の第二句に「封書寄与す涙潺湲」とあり、詳解に「潺湲は涙大いに流るる貌」と。

(注33) 顧宸『註解』に「公独り蜀に流落す。天涯の春色、其の暮景を催す。故人の飛騰を望むに覺へず涙錦水の波を添ふ。正に故人を那何とものすること無きなり」と。宇都宮遷庵の増広本にも挙げる。

〈天涯〉は、我が身は僻遠の地にあり、高適と遠く離れていることをいう。〈遲暮〉は、衰老というのとほぼ同じ。されど本来は『楚辭』の語。同時に官僚として無能でもたまたたとして意を得ないでいるのを言う。〈波〉に〈添〉うは、〈涙〉のこぼれるのが多いこと。〈波〉の字は、暗に〈遲暮〉を承け、流年の感を含む。これは第二句にびたつと続く。高適は朝廷に帰任して登用せられたが、公はひとり〈天涯〉に流落して、もどることができない。〈春色〉は元来人を娛しませるものなのに、流光が衰暮を急ぎ立てて、いたずらに人を悲しみ恨ませる。公の住まいは〈錦水〉に臨み、思わず〈別〉れを怨む〈涙〉がしとどこぼれて雨の落つるがごとく迸り下り、〈波〉に〈添〉うて流れるのである。〈春色〉は時節をいい、暗に〈飛騰〉の栄典を指し、己れの〈遲暮〉と反対に映し出している。まさしく〈故人を那何ともすること無し〉である。〈遙〉の字は怨み深く、自分はひとりここので泣いているのに、彼は知らないのである。〈錦水〉と〈春色〉とは氣脈を通じて用いている。ここでもやはり用字の法を領会すべきである。

067 暮登西安寺鐘樓寄裴十迪

西安寺未詳³⁴。西或ハ作³⁴レ四。顧註³⁴云西安寺在蜀州新津縣³⁴。

神秀禪師所³⁴造。公有和³⁴裴迪登³⁴新津寺³⁴詩³⁴。即西安寺也。上元元年、公暫如³⁴新津縣³⁴。當時與³⁴裴同登³⁴此寺³⁴有³⁴老夫貪³⁴佛日³⁴、隨意宿³⁴僧房³⁴之句³⁴。必裴去³⁴而公暫留³⁴、故³⁴公又獨登³⁴鐘樓³⁴感³⁴暮景³⁴而作³⁴、恨³⁴不³⁴與³⁴裴同³⁴也。然³⁴則編次當³⁴在下³⁴寄³⁴杜位³⁴詩³⁴前後³⁴。誤³⁴錯亂³⁴耳³⁴。

(注1) 輯註(卷八)は、「裴迪蜀州の東亭に登つて客を送り、早梅に逢いて相

憶うて寄せらるるを和す」詩の次にこの詩があり、「四安寺は未詳。或いは云ふ、新津県の南二里に在り。即ち前の新津寺と」。宇都宮遷庵の増広本にも挙げる。新津県は、今の四川省新津県。

〔注2〕（西）字、集註（卷二十二）、集千家註（卷十二）それに錢注（卷十一）及び輯註は（四）に作る。集註、集千家註、輯註は宇都宮遷庵の増広本にも挙げる。

〔注3〕顧宸『註解』に「上元元年、公暫し新津県に如く。蜀州より成都に至る百里。蜀志に云ふ、新津県の南一里に四安寺有り。神秀禪師の造る所なり」と。宇都宮遷庵の増広本にも挙げる。神秀（？～七〇六）は、北宗禪の祖。諡は大通禪師。なお、四川省文史研究館編『杜甫年譜』は、次の（注4）に挙げた新津寺の詩を上元二年に、この詩を上元二年に繫年する。

〔注4〕「裴迪が新津寺に登り王侍郎に寄するに和す」詩（詳註卷九）。訳注稿（六）033「裴迪蜀州の東亭に登って客を送り、早梅に逢いて相憶うて寄せらるるを和す」詩の（注3）参照。

〔注5〕（注4）に挙げた「裴迪が新津寺に登り王侍郎に寄するに和す」詩の第七・八句。

〔注6〕訳注稿（六）036「杜位に寄す」詩。

〔注7〕ちなみに、訳注稿（二）002「鄭駙馬潜曜洞中に宴す」詩の詳解に「杜律の選本、蓋し数種有り、而して邵注専行す。講席齋らす所皆是れなり。故に其の叙次に従はざること能はず」、また後出070「章梓州の橘亭、成都の寶少尹を饒す。涼の字を得」詩の詳解に「世、杜律を読む者、多く邵傳が註本に依る。往往錯誤する者有り。然れども講に臨んで遽かに改正す可からず。姑く其の編次に従ひ、題下に於いて之を辨す」と。

〈西安寺〉は、未詳。〈西〉、或いは〈四〉に作る。顧註に云う、「四安寺は蜀州の新津県にある。神秀禪師の創建するところ」と。公に「裴迪が新津寺に登るに和す」詩がある。とりもなおさず四安寺である。上元元年（七六〇）、公はしばらく新津県に行った。当時、裴迪とともにこの寺に登って、「老夫仏日を貪り、随意僧房に宿す」の句がある。きっと裴迪が去ってから公はしばらく留まったのになにがない、それゆえ公はまたひとり鐘楼に登って暮れなずむ景色に

心感じて作り、裴迪と一緒にでないのを恨んだのである。だとすれば編次は当然「杜位に寄す」詩の前後でなければならない。誤って錯乱したのだ。

暮^{（注8）}倚^{（注9）}高樓^{（注10）}對^{（注11）}雪峯^{（注12）} 僧來^{（注13）}不^{（注14）}語^{（注15）}自鳴^{（注16）}鐘^{（注17）}

雪峯^{（注18）}即^{（注19）}雪山。新津在成都西百里^{（注20）}、則雪山頗近也。僧來^{（注21）}不^{（注22）}語^{（注23）}彼此生面、意不^{（注24）}相屬^{（注25）}也。公登樓^{（注26）}已暮^{（注27）}、獨對^{（注28）}西山^{（注29）}雪景^{（注30）}、忽見^{（注31）}僧^{（注32）}來^{（注33）}。漠然^{（注34）}無情、不^{（注35）}接^{（注36）}一語^{（注37）}、直^{（注38）}往^{（注39）}撞^{（注40）}鐘^{（注41）}、此寫^{（注42）}獨遊孤寂之況^{（注43）}。所^{（注44）}以^{（注45）}思^{（注46）}故人^{（注47）}也。

〔注8〕訳注稿（六）040「野を望む」詩の詳解に「西山は蜀の西陲に在り、一名雪山」とあり、その（注6）参照。

〔注9〕（注3）に挙げた顧宸『註解』参照。

〔注10〕顧宸『註解』に「公、樓に登る已に暮る、独り雪峯に対して、意の思ふ所は故人に在るなり。乃ち忽ち僧の来るを見る。彼此原と相属せず、僧も亦た語らず。竟に自ら往きて鐘を鳴らす」と。宇都宮遷庵の両著にも挙げる。

〈雪峯〉は、とりもなおさず雪山。新津は成都の西百里にあることからすれば、雪山はかなり近いのである。〈僧來たつて語らず〉は、見知らぬ同士で、関心を払わないのである。公が〈樓〉に〈登〉った時はもはや日が〈暮〉れ、ひとり西山の雪景に〈対〉している、ふと〈僧〉が〈來〉るのが見えた。まったく意に介するふうもなく無表情のまま、一語も交えず、そのまま行き過ぎて〈鐘〉を撞く。これは独遊孤寂のありさまを写す。〈故人〉を思うゆえんである。

孤城^{（注48）}返照紅將^{（注49）}斂^{（注50）} 近市^{（注51）}浮煙翠且重^{（注52）}

※紅^{（注53）}：アカリ 翠^{（注54）}：ボンヤリ

倚^{（注55）}樓^{（注56）}所^{（注57）}見暮色。上句仰^{（注58）}見冷淡之景。下句俯^{（注59）}見深沈之況。重^{（注60）}字見^{（注61）}漸迫^{（注62）}黃昏^{（注63）}。

〈樓〉によりかかって目に写った夕暮の景色。上句は仰いで目に写ったひっそりと物寂しい景色。下句は俯して目に写った深く沈みこんだありさま。〈重〉の字は、しだいに黄昏に近づいてゆくのをあ

らわす。

多病獨愁^テ常^ニ闕寂^ニ 故人相見^テ不^レ從容^ニ

※不從容^ニ：ユルリトセズ

闕音^ニ、靜也^ニ。公與^レ裴遇^ニ于此^ニ、裴即先去^テ而公獨留^ル。空谷ノ聲音^ニ、交^レ臂而失^ス。故^ニ言^ニ吾多病愁苦^ニ、常^ニ恨^ニ無^レ友^ニ、不^レ勝^ニ闕寂^ニ。偶與^ニ故人^ニ邂逅^ニ、冀^{クハ}可^ニ以^ニ慰^ニ懷抱^ニ、奈何^ノ倉卒^ニ別去^テ不^レ能^ニ從容^ニ盡^ニ歡^ニ、徒^ニ使^ニ人^ニ惆悵^ニ一也^ニ。夫故人乃爾^ニ、僧來^テ不^レ語^ラ、固^{ヨリ}其^レ所^ニ也^ニ。

(注11) 薛益『分類』(卷一、寺觀)に「闕は、靜なり」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

(注12) 『莊子』徐無鬼篇に「夫れ虚空に逃るる者は、藜藿の黽黽の迪に柱がり、其の空に跟き立つ。人の足音の蹻然たるを喜ぶ。又た況んや昆弟親戚の側に警咳する者をや」と。

(注13) 『莊子』田子方篇に「吾れ身を終ふるまで汝と一臂を交へて之を失ふ。哀しまざる可けんや」と。一臂を交うは、腕と腕とを組み合うこと。親しく手を携えることをいう。

(注14) 本来もつともなことであるという意。『左伝』襄公二十三年および哀公十六年に見える言い方。

〈闕〉、字音は鵲^{けき}、靜である。公は裴迪とここで出会ったが、裴迪は先に去って公だけひとり留まった。人氣^{ひとけ}ない谷間に響く蹻音を聞くような予期せぬ喜びに、手を取り合ったのも束の間、これを失った。それゆえ言う、自分は〈多病〉で〈愁〉い苦しみ、〈常〉に友なきを恨み、〈闕寂〉にたえないでいた。たまたま〈故人〉と邂逅し、懷抱を慰めることができようと願ったものの、どうしたにか、あたふたと別れ去って〈從容〉と歡を尽くすことができず、いたずらに人をして傷み悲しませるのであると。そもそも〈故人〉でさえそうであつてみれば、〈僧來たつて語ら〉ないのは、もとより致し方ないところである。

知君^カ苦思緣^レ詩^ニ瘦^ニ 太^ニ向^ニ交情^ニ萬事^ニ慵^ニ

緣^レ詩^ニ瘦^ニ謂^レ勞^ニ於^ニ苦吟^ニ。稱^ニ其精^ニ于詩^ニ也。註家或ハ引^ニ崔浩^ニ苦吟^ニ詩^ニ瘦^ニ上^ニ、偽^ニ蘇^ニ所^ニ捏造^ニ也。元人辛文房撰^ニ唐才子傳^ニ以爲^ニ崔顥^ニ事^ニ、轉訛^ニ傳^ニ誤^ニ耳。裴詩多^ニ不^レ傳^ニ。僅^ニ附^ニ見^ニ王維^ニ集中^ニ、而其妙殆與^ニ王伯仲^ニ。公所^ニ以^ニ稱許^ニ也。萬事慵謂^ニ其真率^ニ也。蓋裴眞^ニ雅人^ニ、天真爛漫、嗜^ニ詩^ニ之^ニ外^ニ、萬事泊如、不^ニ有^ニ區區^ニ拘^ニ泥^ニ世情^ニ。故^ニ其於^ニ交遊^ニ、亦淡^ニ如^ニ水^ニ也。此贊^ニ其詩律人品^ニ、而嘆^ニ邂逅^ニ之倉卒^ニ。語意如^ニ響^ニ如^ニ毀^ニ、惋惜惘然乃爾。

(注15) 〈太〉字、錢注は〈大〉に作り、「一に太と云ふ」と。

(注16) 邵宝『集註』(卷二十二、釈老類)及び薛益『分類』に「詩瘦は、崔浩吟詠を愛す。一日病より起つ。友人之に戯れて曰く、子、詩を苦吟して瘦するなりと、張遠『會粹』に「南史に、崔浩、吟詠を愛す。一日病より起く。友人之に戯れて曰く、子、詩を苦吟して瘦するなり」と。『分類』は宇都宮遯庵の増広本に、また『會粹』は詳説に挙げる。なお、崔浩のことは「南史」には見えない。

(注17) 偽蘇注については、訳注稿(三)、012「曲江二首」(其一の(注13)および訳注稿(六)、033「裴迪蜀州の東亭に登つて客を送り、早梅に逢いて相憶うて寄せらるるを和す」詩の(注17)参照。

(注18) 『唐才子傳』卷一、崔顥の条に「顥、吟詠に苦しむ。病より起くるに當り清虛たり。友人之に戯れて曰く、子病に此の如くなるに非ず、乃ち詩を苦吟して瘦するのみと。遂に口実と爲す」と。なお、『唐才子傳』については、布目潮風・中村喬『唐才子傳之研究』(汲古書院、一九八二年)、傳璇琮主編『唐才子傳校箋』(中華書局、一九八七年)があり、後者に「此れ本づく所を知らず」とする。

(注19) 顧宸『註解』に「今、万事慵しと曰ふは、具さに裴が率真爛漫を道ふ。眞の人品、眞の詩品、此に於いて畢く出でざる無し」と。宇都宮遯庵の増広本にも引く。なお、『註解』の元禄六年(一六九二)刊本に「今日三万事情、道裴之率、真爛漫、真人品、真詩品、無不^ニ此^ニ畢出^ニと訓点を施すのは、よくない。

〈詩に縁つて瘦す〉は、苦吟に骨を折ること。その詩に精通してい

るのを称するのである。注釈家のなかには或いは崔浩が詩を苦吟して瘦せた話を引くものがあるが、偽蘇注の捏造である。元の辛文房は『唐才子伝』を撰し、崔顥の故事としたが、転訛して誤まりを伝えたのだ。裴廸の詩は多くが伝わっておらず、わずかに王維の集のなかに附して見えるだけだが、その妙なることほとんど王維と伯仲する。公が称許するゆえんである。〈万事慵し〉は、その真率なることをいうのである。けれど裴廸は真に雅人であって、天真爛漫として、詩を好む以外は、〈万事〉あつさりとしていて、あえてこせこせと世情に拘泥しなかった。それゆえその交遊においても、やはり淡きこと水のごとくであつたのである。これはその詩律や人品を讃え、邂逅のあわただしく東の間のを嘆いている。語意は誉めるがごとく毀るがごとくであるが、嘆き惜んで茫然自失すればこそである。

068 陪李十七司馬^ニ皂江^上觀^ニ造^ル竹橋^一、即日^ニ成^ル。往來免^ニ冬寒^一

入^ニコト^レ水^一。聊題^{シテ}短述^ニ簡^ニ李公^一

一本往來^ノ下有^ニ之人^一二字、無寒字^一。此亦當^ニ是上元二年^一在^ニ蜀州^一作^ニ上^一。皂江一名潯江、在^ニ蜀州唐興縣^一東^一。竹橋ハ編^レ竹ヲ構^レ橋^一、以^ニ蜀ノ地多^ニ大竹^一也。李蓋蜀州ノ司馬、管^ニ課造^ニ竹橋^一。公陪觀^{シテ}感^{シテ}其巧^ニ、因^テ詠^{シテ}而贊^レ之也。蓋此橋每歲新^ニ造^一。孟子所^レ謂歲十一月徒杠成^ル也。簡者代^ニ簡^一以^ニ此作^一也。

〔注1〕『唐詩貫珠』（卷四十一、名勝一附城橋）を指す。なお、錢注（卷十一）および輯註（卷八）は、〈之人〉の二字と〈寒〉字とがある。

〔注2〕顧宸「註解」に、黃鶴の注を引いて「當^ニ是上元二年^一、蜀州に在つて作るなるべし」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

〔注3〕錢注および輯註に「元和郡國志に潯江一名皂江。蜀州唐興縣の東三里を經」と。輯註は、宇都宮遯庵の増広本にも挙げるが、元和郡國志を元和志に誤る。

〔注4〕釈大典『杜律發揮』に「李蓋為^ニ蜀州司馬^一、管^ニ課造^ニ竹橋^一也」と。

〔注5〕『孟子』離婁下に「歳の十一月に徒杠成り、十二月に輿梁成る、民未だ渉るを病まざるなり」と。徒杠は、歩行者しか渡れない橋。輿梁は車の通行できる橋。

一本には〈往來〉の下に〈之人〉の二字があり、〈寒〉字がない。これもやはり当然、上元二年（七六二）、蜀州で作られたものであるはずだ。〈皂江〉は、一名、潯江。蜀州唐興縣の東にある。〈竹橋〉は、竹を編んで架けた橋、蜀地に大竹が多いためである。〈李〉は、けれど蜀州の司馬で、橋を造るのを管轄監督する。公は陪席して見物しその巧みなのに感心し、因つて詠じてこれを讃えたのである。けれどこの橋は毎歲新たに造られるのであろう。『孟子』のいわゆる「歳の十一月、徒杠成る」である。〈簡す〉は、簡に代えるのにこの作をもつてするのである。

伐^ニ竹^一爲^ニ橋^一結構同^シ。囊^ニ裳^一不^レ涉^ニ往來^一通^ス

同ハ謂^ニ其堅密不^レ異^ニ木橋^一也。囊ハ揭也。詩ノ鄭風・囊^ニ裳^一涉^ニ漆^一。此用^ニ其語^一。倒裝^ノ句法。言^ニ以^ニ竹^一爲^ニ橋^一而其結構卻^ニ與^ニ眞橋^一同^一。不^レ須^ニ囊^ニ裳^一涉^ニ水^一而往來得^ニ通^一也。胡燮亭云起句似^ニ平淺直^一。但一同^ニ字便有^ニ別致^一。應^ニ橋^一字。歇後ノ語。

〔注6〕顧宸「註解」に〈伐竹〉の〈竹〉字を〈木〉に作り、「本是れ竹橋を造るに、却つて〈木〉を伐つて橋と爲す」と云ふ。言ふところは其の制度の緊密、木橋に異なるなり。故に曰く〈結構同じ〉と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

〔注7〕『詩経』鄭風・囊裳に「子我を惠思せば、裳を褰けて漆を渉らん」と。

〔注8〕訳注稿（二）、001「張氏の隱居に題す」詩の（注12）参照。

〔注9〕『唐詩貫珠』に「首、竹を以て橋と爲す、而して其の結構却つて石橋と相同じ。裳を褰〔褰〕して水を渉ることを須^ニひず、往來通ずることを得るを言ふ」と。

〔注10〕『唐詩貫珠』に「起句、浅直に似たり。但だ一の同字に便^ニち別致有^一り。蓋し石梁板橋、此れ是れ常情。今、竹を以て之を爲る、所以に即ち一の同字、包羅し得て妙。同字、橋字に応ず。歇後の語なり」。歇後は、句末の詞を省略した言い方。

〈同じ〉は、その堅密なること木の橋に異ならないのをいうのである。〈褰〉は、掲である。『詩経』鄭風に「裳を褰げて漆を渉る」と。これはその語を用いる。倒装の句法。竹で橋をつくるがその〈結構〉は却って真の橋と同じで、〈裳を褰げて水を渉る〉必要もなく〈往来〉が〈通〉ずることができると言うのである。胡燮亭が云う、「起句は浅直なようだが、但だ〈同〉の一字にこそ別の致がある。〈橋〉の字に应じている。歇後の語」と。

天寒^{シテ}白鶴^ニ歸^ル華表^ニ 日落^テ青龍^見ハル水中^ニ

橋前^ニ設^テ雙柱^ヲ曰^フ華表^ト。爲^レ橋^ノ建^標也。故^ニ白樂天^題ニ漕上^ニ新

橋^ニ詩^ニ影定^{欄干}倒^{標高}華表^齊。或^ハ前後^俱ニ設^レ之^ヲ。大業

記^ニ通仙橋^{南北}有^ニ華表^一、是也。搜神記^ニ遼東城門^有華表柱^一、丁

令威化^{シテ}白鶴^ニ來^止其上^一。今因^ニ橋前^亦設^ニ華表^一、遂^ニ想^定

有^ニ白鶴^ノ棲^止スル。蓋^ハ贊^ス其爲^ニ名橋^一也。異苑^ニ載^ス晉^{大康}二年冬

大雪^ノ。南州^ノ人見^ニ白鶴^語於橋下^一。曰、今茲最寒^シ、不^レ減^セ

堯崩^{セシ}年^ニ。於是^ニ飛去^ル。天寒^ノ二字正^ニ用^レ此^一、合^ニ題中^ノ冬寒^ニ、

非^ニ硬裝^一也。青龍^ハ喻^ニ橋影^ニ。楚辭^ニ磨^蛟龍^以梁^津、橋比^レス

龍^本ニ諸此^一。又後漢^ノ費長房^以仙翁所授^ニ竹杖^一投^ニ葛陂中^一、

顧視^レハ則龍也。併^テ用^レ之^ヲ。言^ニ水中竹影^之映^{スル}。蓋^ハ日落^{橋影}亦

以^ニ竹色^青シテ而橋形^天矯^一。故^ニ水中之影^疑ニ青龍^{出現}一^也。

舊註引^ニ朝野僉載^一則天^ノ時、默啜破^ニ趙州^一、見^ニ青龍臥^{石橋}ニ

事^上。牽強^{迂僻}、一筆^勾シテ之^ヲ可也。

(注11) 薛益『分類』(卷二、橋梁)に「華表は、橋前の二柱を華表と曰ふ」と。

宇都宮遷庵の増広本にも挙げる。

(注12) 中唐・白居易「李相公留守の漕上の新橋に題するに和す、六韻」詩(『白

氏文集』卷七十一)に、次のように見える。

選石鋪新路 安橋壓古堤 石を選んで新路を鋪き、安橋古堤を圧

似從銀漢下 落傍玉川西 銀漢從り下るに似て、落ちて玉川の西

に傍ふ

影定欄干倒 標高華表齊

影定まりて欄干倒れ、標高うして華表

烟開虹半見 月冷鶴雙栖

烟開いて虹半ば見はれ、月冷うして鶴

材映愛龍小 功嫌元凱低

材は愛龍の小さきに映じ、功は元凱の

從谷濟世後 餘力及黔黎

從谷として世を濟ふの後、餘力 黔黎

(注13)

南朝宋・劉義慶『大業雜記』(『說郭』号一〇所収)に「(建国)門の

南二里に甘泉泉有り。洛を疏して伊に入る。渠上に通仙橋五道有り、時

人之を五橋と謂ふ。橋の南北に華表有り、長さ四丈、各おの高さ百餘丈」

(注14)

『唐詩貫珠』に挙げる。但し、晋・干宝の『搜神記』ではなく、陶潜の

作に仮託された『搜神後記』の卷一に見える。元禄十二年(一六九九)

刊の和刻本があり、汲古書院刊『和刻本漢籍隨筆集』第十三集にその影

印を収める。

「丁令威は本と遼東の人なり。道を靈虛山に学ぶ。後に鶴に化して遼

に帰り、城門の華表に集まる。時に少年有り、弓を挙げて之を射んと欲

す。鶴乃ち飛びて空中に徘徊して語って曰く、鳥有り鳥有り丁令威、家

を去って千年今始めて帰る。城郭は故の如くにして人民は非なり。何

ぞ仙を学ばずして冢壘壘たる、と。遂に高く上つて天に冲る。今、遼東

の諸丁云ふ、其の先世升仙する者有り。但だ名字を知らざるのみ」。

(注15)

『唐詩貫珠』(注9)に引いた箇所が続いて「橋に華表有るに因つて、

遂に想ふ定めて白鶴の棲止する有らんと」。

(注16) 輯註に「劉敬叔が異苑に、晋の大康二年冬大いに雪ふる。南州の人、

二白鶴橋下に語るを見る。曰く、今茲寒し、堯崩するの年に減ぜずと。

是に於いて飛び去る」と。顧宸『註解』には、「胡孝轅曰く」として異苑

を引く。いずれも宇都宮遷庵の増広本に挙げる。南朝宋・劉敬叔『異苑』

の卷三に見える。胡孝轅は、明・胡震亨(字は孝轅)のこと。その『唐

音癸籤』卷二十一、詠箋七に見える。

(注17) 『唐詩貫珠』に「天寒の鶴、來歴有り。正に題中の冬字と合す。仍ば硬

装に非ざるなり。故に妙」と。硬装は、無理なこじつけ。

〔注18〕顧宸『註解』に、やはり胡震亨の説として「楚辭に（蛟龍を）麾^{さしな}いて以て津に梁^{はな}す」と。橋、龍と称す可し」と。宇都宮遯庵の増広本に挙げらる。これも『唐音癸籤』卷二十二、詰箋七に拠る。『楚辭』の句は、「離騷」に見える。

〔注19〕葛洪『神仙伝』（『初学記』卷三十、龍の部に引く）に「費長房、壺公と俱に去る。後、壺公謝して之を遣る。長房家に到る能はざるを憂ふ。公用ふる所の杖を以て之に騎らしむ。忽然として睡るが如し。已に家に到る。騎する所の竹杖を以て葛陂中に投ず、之を顧視すれば乃ち青龍なり」と。

〔注20〕『唐詩貫珠』に「日落ち橋影も亦た落つ。青龍を水中に見る所以。竹色青くして橋影夭矯たるを以て、以て青龍に比す可し」と。

〔注21〕『唐詩貫珠』に「蔡夢弼曰く」として「朝野僉載に曰く、河北道趙州に石橋有り甚だ工なり。則天の時、默啜、趙州を破る。橋前に至つて馬、地に跪^{ひざまづ}いて進まず。但だ青龍の橋上に臥すを見る。奮迅して怒れば、乃ち遁れ去る」と。これは『集千家註』（卷九）に引くのに拠る。なお、輯註にも『朝野僉載』を挙げ、宇都宮遯庵の増広本にそれを引くが、文字に少しく異同がある。『朝野僉載』は、初唐・張鷟撰。その巻五に見える。

〔注22〕勾は、抹消する。例えば、南宋・朱熹『宋名臣言行録』卷七、范仲淹の条に「公、班簿を取つて不才の監司を視、一人の姓名を見る毎に、一筆に之を勾し、次を以て更易す」と。ちなみに、明・張自烈『正字通』に「俗に除去を謂ひて勾と曰ふ」として、范仲淹の故事を挙げる。

橋の前に双柱を設けるのを「華表」という。橋のために標を建てるのである。されば白楽天の「漕上の新橋に題す」詩に「影定まつて欄干倒れ、標高うして華表齊し」と。あるいは前後ともにこれを設けることもある。『大業記』に「通仙橋の南北に華表がある」というのが、そうである。『搜神記』に「遼東の城門に華表柱があり、丁令威が白鶴に化して飛んできてその上にとまった」と。今、橋の前にやはり「華表」を設けてあることから、かくてきつと「白鶴」が棲止するだろうと想像している。けだしその名橋たるを讃えるのである。『異苑』に「晋の大康二年冬大いに雪がふった。南州の人が二羽

の白鶴が橋の下で語り合っているのを見た。今年はいちばん寒い。堯が崩じた年におとるまい、と。そう言つて飛び去った」という話載せる。〈天寒〉の二字はまさしくこれを用い、題中の〈冬寒〉に合わせていて、無理なこじつけではないのである。〈青龍〉は、橋影に喩える。『楚辭』に「蛟龍を麾^{さしな}いて以て津に梁^{はな}す」とあり、橋を龍に比するのはこれに基づく。また後漢の費長房が仙翁から授けられた竹杖を葛陂中に投じ、ふりかえつてみると龍になっていた話を併せ用いる。水面に竹の影が映つているの言う。けだし「日落」ち橋影も竹色の青くして橋の形がアーチ型であることから、それゆえ水面の影は「青龍」が出現したかと思われるのである。旧註に『朝野僉載』に載せる則天武后の時、默啜が趙州を破り、青龍が石橋に臥するのを見たという話を引くのは、こじつけの僻説で、いっさい消し去つてよろしい。

顧^ル我老^ニ非^ニ題柱ノ客^ニ 知^ル君才^ハ是^ニ濟川ノ功^ニ

※題柱：シユツセヲノゾム 濟川功：ケイザイノハタラキ

〔注23〕『唐詩貫珠』に「成都志に昇仙橋有り。司馬相如、長安に入るに、其の柱に題して曰く、大丈夫駟馬車に乘らざれば、復^{ふた}びは此の橋を過ぎずと。後果して伝車に乗りて其の処を過ぐ」と。但し成都志については、未詳。あるいは成都記の誤りか。「哥舒開府翰に投贈す二十韻」詩（詳註卷三）の第三十三、四句に「壯節初めて柱に題し、生涯独り転蓬」と也。

〔注23〕『唐詩貫珠』に「成都志に昇仙橋有り。司馬相如、長安に入るに、其の柱に題して曰く、大丈夫駟馬車に乘らざれば、復^{ふた}びは此の橋を過ぎずと。後果して伝車に乗りて其の処を過ぐ」と。但し成都志については、未詳。あるいは成都記の誤りか。「哥舒開府翰に投贈す二十韻」詩（詳註卷三）の第三十三、四句に「壯節初めて柱に題し、生涯独り転蓬」と

あり、輯註(卷二)に「成都記に、司馬相如初めて西去し、昇仙橋の柱に題して曰く、駟馬車に乘らざれば、復びは此の橋を過ぎずと。後果して伝に乗りて其の処を過ぐ。橋は望郷台の東南一里に在り。華陽県に管す」と。これは、宋・郭知達撰『九家集註杜詩』(卷十七)に挙げるのによる。また本詩の錢注には『華陽国志』を引いて「蜀城の北十里に昇仙橋有り。客を送る觀。司馬相如初めて長安に入るに、其の橋に題して曰く、大丈夫赤車駟馬に乘らずんば、汝の下を過らざるなり」と。ちなみに、『蒙求』(卷中)の標題に「相如題柱」がある。

(注24) 『尚書』説命に「若し巨川を濟らば、汝を用つて舟楫と為さん」と。

(注25) 『唐詩貫珠』に「五は自ら謙して一老字を下す。蓋し少壮の時、原と題柱の志有り、今は老いて遂げる能はざる耳。六は李公を賛す」と。

(注26) 『左伝』隱公四年に見える衛の石碣の語に「老夫耄せり矣。能く為すこと無きなり」と。

『成都志』に「蜀城の北に昇仙橋がある。司馬相如が長安に赴く際その柱に題していう、大丈夫たるもの四頭立ての馬車に乗るようにならなければ、二度とはこの橋を渡らない、と。後、果して車に乗って蜀に入った」と。今、蜀中の故事であるから用い方がとりわけぴったりだ。《濟》は、渡である。『尚書』説命に「若し巨川を濟らば、汝を用て舟楫と為さん」と。大政を輔佐することをいう。この一聯は、自ら謙遜して李公を讃えている。その意味は、私もやはり少壮の時には、元来《題柱》の志をもっていたものだが、今では年老いてしまい、もはや存分にやれる力がないのだ。李はちやうど壮年の偉才で、やがてきつと朝政に預り、さらに《濟川》の大功を建てるに違いない。どうして久しく州郡の職にちこまっていようか、と言うのである。けだしその造橋を管轄監督する功を觀て、才略の大きいに用らるべきを知ったのであろう。

合歡卻笑千年事 驅石何時到海東

※合歡：ワタマシノサカモリ 驅石：オモクロシキザウサ

合歡舊説解^(注27)爲^(注28)三舉州歡欣^(注29)。或^(注30)謂治席爲^(注31)歡飲^(注32)、共^(注33)落^(注34)其

(注28) 成^(注28)。不^(注28)知^(注28)孰^(注28)是^(注28)。其餘諸説俱^(注28)未^(注28)三穩妥^(注28)。或^(注28)別^(注28)有^(注28)係^(注28)橋^(注28)典

故^(注28)。姑^(注28)闕^(注28)疑^(注28)以^(注28)俟^(注28)。一説^(注28)歡^(注28)字疑^(注28)クハ觀^(注28)之訛^(注28)、謂^(注28)衆聚^(注28)觀^(注28)ヲ。語

殊^(注28)不^(注28)典^(注28)ナリ。驅^(注28)石^(注28)ヲ對^(注28)三竹橋^(注28)ニ説^(注28)ク。何^(注28)ノ時^(注28)ハ反^(注28)三照^(注28)、題中^(注28)ノ即日成^(注28)ル。

述^(注28)異^(注28)記^(注28)ニ秦^(注28)始皇^(注28)帝^(注28)作^(注28)三石橋^(注28)於^(注28)海上^(注28)、欲^(注28)過^(注28)海^(注28)ヲ觀^(注28)ニト^(注28)日^(注28)ノ出^(注28)處^(注28)。

有^(注28)三神人^(注28)一驅^(注28)石^(注28)ヲ下^(注28)海^(注28)。石去^(注28)コト不^(注28)レハ速^(注28)ヲ、神輒^(注28)鞭^(注28)レ之^(注28)。石皆流^(注28)ス

血^(注28)。今其石色猶赤^(注28)。此結直^(注28)ニ承^(注28)上^(注28)相引^(注28)而下^(注28)。言^(注28)李公濟川之

功即日落成^(注28)。昔秦皇之驅^(注28)石^(注28)、物重^(注28)事煩^(注28)、而難^(注28)成^(注28)功^(注28)。何^(注28)ノ時^(注28)カ

得^(注28)下^(注28)到^(注28)海東^(注28)ニ而觀^(注28)コトヲ日^(注28)ノ出^(注28)處^(注28)。徒^(注28)勞^(注28)而貽^(注28)笑^(注28)耳。嘲^(注28)其豪舉

費^(注28)レ力^(注28)而贊^(注28)三竹橋簡易速^(注28)成^(注28)之功^(注28)也。千年ノ字亦以^(注28)貽^(注28)笑^(注28)千載^(注28)、

反^(注28)觀^(注28)即日成^(注28)ニ功^(注28)ヲ、非^(注28)徒^(注28)三墳^(注28)ニ也。

(注27) 例^(注28)えは、積大典『杜律發揮』に、(注28)に挙げた箇所に「解^(注28)シテ爲^(注28)二人

歎^(注28)欣^(注28)」と。

(注28) 顧宸『註解』に「合歡は、橋を造ると橋を觀る者と共に其の成を落し、

往來通濟の人を併せて、歎欣鼓舞せざるは無きを謂ふ」と。建造物の完

成を祝う祭りを落^(注28)という。

(注29) 例^(注28)えは、積大典『杜律發揮』に、次の(注28)に挙げた箇所に続けて

「余以為合歡或^(注28)謂^(注28)三兩重^(注28)編^(注28)竹者^(注28)也」と。

(注30) 邵傳『集解』に「合歡當に合觀に作るべし。言ふところは李十七に陪

して橋を造るを觀るなり。謂ゆる合歡といふ者は訛れり。此れ張羅峰

が解^(注28)」と。張羅峰は、明・張孚敬(一四七五―一五三九)のこと。訳注

の訛りで、衆人が聚まって観ることをいうとするが、語はとりわけ典雅ではない。〈石を駆る〉は、〈竹橋〉に対して説く。〈何れの時〉は、題中の〈即日成る〉に反照している。『述異記』に「秦の始皇帝が石橋を海上に作って、海を渡って日出ずる処をみようとした。神人が石を追いたてて海におとした。石がゆくこと速かでない、神はそのたびに鞭うち、石は皆血を流した。今でも、その石の色はまだ赤いまだ」と。この結びは直ちに上を承けて相引いて言い下している。その意味は、李公の〈済川の功〉は〈即日〉落成した。昔、秦皇が石を追いつたが、重くて面倒で、功を成すことが難しかった。〈何れの時にか〉〈海東に到〉って日出ずる処を観ることができようか。むだに骨を折って笑いを貽したただけだ、というのである。その豪壮な行いが力を費したのを嘲って、〈竹橋〉の簡単容易で速かに完成した功績を讃えるのである。〈千年〉の字もやはり笑いを千載に貽すことから、〈即日〉功を成すに對比して際立たせており、いたずらに文字を填めたのではないのである。

069 野人送櫻桃^一

※桜桃：ユスラムメ^{（注一）}

因^{（注二）}沅花ノ村民爲^レ公贈^ニ此^ヲ、而憶^テ先朝之賜^ヲ、追感^{スル}當時之恩^ニ也。櫻桃^{（注三）}樹不^ニ甚高^{カラ}、春初開^ニ白花^ヲ、繁英如^レ雪、結^{（注四）}子^ヲ尤盛^{ナリ}。二月乃熟^ス。大如^ニ拇指^ノ、圓^ニ而色朱^シ。故亦名^{（注五）}朱櫻^一。每^ニ一朶^ノ數十顆^ノ、如^ニ貫珠^ノ。以下其先^{（注六）}二百果^ニ熟^{（注七）}上^ル、故^{（注八）}特^ニ薦^ニ寢廟^一。見^{（注九）}禮記^ノ月令^ニ。唐^ノ制四月朔日^ニ内園進^ニ櫻桃^一、寢廟薦^ニ訖^{（注一〇）}、頒^ニ賜^ニ百官^一、各^{（注一一）}有^レ差[、]見^{（注一二）}李綽^ノ歲時記^ニ。王^ノ摩詰^ノ韓退之^ノ竝^ニ有^ニ勅^ヲ賜^ニ櫻桃^一詩^上。蓋^{（注一三）}每歲之恩例也。野人贈^ニ櫻桃^一、視^{（注一四）}勅^ヲ賜^ニ櫻桃^一、題面已^ニ見^ニ感懷^一。

（注一） 桜桃は、寺島良庵『和漢三才圖會』（卷八十七）にもユスラムメのこととするが、それではなく、サクランボ。このこと、青木正児『中華名物

考』参照。但し、中国原産のそれで、現在わが国で一般に見られるものとは種類が異なる。

（注二） 『和漢三才圖會』に「本草綱目」を引いて「其の樹甚しくは高からず、春の初めに白き花を開き、繁英なること雪の如し。実を結ぶこと一枝に數十顆、百果に先だちて三月に熟す」云々と。

（注三） 朱桜は、西晋・左思の「蜀都の賦」（『文選』卷四）に「朱桜は春熟り、素奈は夏成る」と見え、その李善注に「漢書』卷四十三、叔孫通伝の「古は春に果を嘗むる有り、今、桜桃熟す、嘗む可きなり」というのを挙げる。なお、明・孫丕顯編『文苑彙編』（卷二十三）に「桜桃、一名朱桃」とあり、宇都宮遯庵の増広本に挙げるが、（朱桃）の桃を桜に作る。

（注四） 『礼記』月令に「仲夏の月（中略）、是の月や天子乃ち雛を以て黍を嘗め、羞むるに含桃を以てし、先づ寢廟に薦む」とあり、鄭玄の注に「含桃は、桜桃なり」と。

（注五） 顧宸「註解」に「李綽が歳時記に云ふ、唐制、四月一日、内園櫻桃を進め、寢廟薦め訖つて頒賜す、各おの差有り」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。李綽の歳時記は、晩唐の李綽「秦中歳時記」のこと。

（注六） 盛唐・王維（字は摩詰）の「勅して百官に桜桃を賜ふ」詩（『王右丞集』卷十／『唐詩選』卷五）に、次のように詠じられている。

芙蓉闕下會千官

芙蓉闕下 千官を会し

紫禁朱櫻出上蘭

紫禁の朱櫻 上蘭を出づ

總是寢園春薦後

総べて是れ寢園春薦の後

非關御苑鳥銜殘

御苑鳥銜み残すに非ず

歸鞍競帶青絲籠

帰鞍競つて帶ぶ青糸の籠

中使頻傾赤玉盤

中使頻りに傾く赤玉の盤

飽食不須愁內熱

飽食 内熱を愁ふるを須ひず

大官還有諸漿寒

大官還た諸漿の寒き有り

なお、王維の集には、崔興宗の同詠の作を載せる。

中唐・韓愈（字は退之。七六八／八二四）の「水部張員外の宣衛に百官に桜桃を賜ふ詩に和す」詩（『韓昌黎集』卷三）に、次のように詠じられている。

漢家舊種明光殿

漢家旧と明光殿に種う

炎帝還書本草經

炎帝還た本草經に書す

豈似滿朝承雨露 豈に似んや滿朝雨露を承くるを

共看傳賜出青冥 共に看る伝賜の青冥を出づるを

香隨翠籠擎初到 香は翠籠に隨つて擎けて初めて到り

色映銀盤寫未停 色は銀盤に映じて寫して未だ停まらず

食罷自知無所報 食し罷んで自ら知る報ゆる所無きを

空然慙汗仰皇局 空然慙汗 皇局を仰ぐ

水部張員外とは、張籍（字は文昌、七六六？～八三〇？）のことで、「朝

日勅して百官に桜桃を賜ふ」詩（『張司業集』卷四）がある。

ちなみに、『唐詩貫珠』（卷六十、食物）に杜甫のこの「野人送桜桃」

詩をはさんで前に王維の詩を、後に韓愈の詩を載せる。

（注7） 釈大典『杜律發揮』に「野人贈三字、已見感懷」と。

浣花の村人が公のためにこれを贈ってくれたことから先朝（肅宗）

の下賜を憶い出し、追懷して当時の皇恩に感じるのである。（桜桃）

は、樹はあまり高くなく、春の初めに白い花を開く。繁った花びらは

雪のようで、実を結ぶことがとりわけ多い。二月になって熟す。

大きさは親指ほどで、丸くて色は朱い。それゆえまた朱桜とも名づ

く。一朵ごとに数十粒が累なつて連なつた真珠のようである。ほか

の果実に先んじて熟すことから、それゆえ特に寝廟に薦める。『礼

記』の月令に見える。唐代の制度では四月朔日に内園から桜桃を進

め、寝廟で薦めおわつて、百官に頒ち賜わつたが、官位に応じてそ

れぞれ差があった。李綽の『歳時記』に見える。王摩詰や韓退之に

いずれも勅して桜桃を賜う詩がある。ただし毎歳恒例の恩典であつ

たのだろう。（野人）が桜桃を贈ってくれたのを、桜桃を賜ったのに

比べ、題面にすでに感懷をみてとれる。

西蜀ノ櫻桃也自紅ナリ

野人相贈滿筠籠

※紅：キレイ

也自二字早ク寫ス一飯不レ忘意（注8） 紅謂ニ鮮麗（注9）ナルヲ。如ニ紅顏紅

泉ノ皆是也。野人相贈反ニ襯後聯。筠籠亦映ニ下ノ金盤玉筍（注10）。蓋

西蜀邊陲之櫻桃亦如ニ上苑所進者ノ宛然一般紅艶、所ニ以觸ニ

發スル感懷（注11）也。昔日禁廷勅ニ中使ニ盛ニ金盤ニ以賜フ者、今乃野人

裝ニ竹籃ニ相贈ル、其感懷何如哉。筠音韻、竹也。（注12）

（注8） 蘇軾の「王定国詩集叙」に「古今詩人衆し、而して杜子美を首と為す。

豈に其の流落飢寒、終身用ひられずして一飯も未だ君を忘れざるを以て

に非ずや」と。訳註稿（一）、「杜文貞公伝」の（注84）参照。

（注9） 『夜航詩話』卷二に「蓋し紅は清麗の稱。諸色中紅は最も清麗なるを

以て、故に美顏を稱して紅顏と曰ひ、清泉を紅泉と曰ふ。猶ほ古語に鮮

明を以て翠と為すが如し」と指摘する。（紅泉）の語、例えば、南朝宋・

謝靈運の「華子崗に入る、是れ麻源第三谷」詩（『文選』卷二十六）に「銅

陵碧澗に映じ、石磴紅泉に瀉ぐ」と見えるが、その場合は、丹砂を含ん

でいるため赤色をしているのをいう。

（注10） 釈大典『杜律發揮』に「筠籠映ニ下ノ金盤玉筍」と。

（注11） 『唐詩貫珠』に「桜桃を見るに因つて、心事を觸発す。故に起句西蜀の

桜桃と言ふなり。長安の者の如く一般の紅色、便ち一種の感懷の意有

り」と。

（注12） 訳註稿（三）、020「崔氏東山草堂」詩に既に同様の注がある。

《也た自ら》の二字は、早くも「一飯忘れず」の意を写し出して

いる。（紅）は、くつきりと鮮やかなこと。たとえば紅顏・紅泉のよ

うな例は、いずれもそうである。（野人相贈る）は後聯に対比して際

立たせ、《筠籠》もやはり下の《金盤玉筍》に映射している。けれど

《西蜀》辺陲の《桜桃》も上苑から進められたものそっくりで、宛

然として同じように紅くつやつやとしており、感懷を觸発するゆえ

んである。昔日禁廷で中使に勅して《金盤》に盛って賜わたったのが、

今ではなんと《野人》が竹籃に装って贈ってくれる、その感懷はど

のようであろうか。（筠）、字音は韻、竹である。

數回細ニ寫シ愁ニ仍破（注13） 萬顆勻シク圓（注14） 訝ニ許同（注15）

※數回：タビ／＼ 細：チトツ、写：アケル 愁：キヅカイ 破：

ツブレル 勻：ソロフテ 訝：キミヤウ 許：コノヤウニ

數回ハ頻頻也。細寫ハ些些傾移也。公ノ詩ニ豈無ニ成都ノ酒、憂レテ

國ヲ只細ニ傾々、又桃花細ニ逐ニ楊花ニ落（注16） 細ノ義可レ見已。寫ハ傾輸也。

曲禮^(注15)器之概者ハ不^レ寫^ス、其餘ハ皆寫^ス。註ニ寫ハ謂^レ傳^ニ器中^ニ。此謂^ニ自^ニ竹籠^ニ傳^ニ於他器^ニ也。愁猶恐^ノ也。愁ハ仍破^ニ恐^ニ紅苞易破[、]爲^ニ其善^ニ熟^ニ也。數回細^ニ寫^ス、妙^ニ寫^ニ愛玩^ニ之狀^ニ。訝ハ者驚感之餘、疑^ニ怪^ニ之^ニ也。許猶爾[、]如此^ノ也。萬顆之多[、]當^ニ有^ニ異同[、]而顆顆一樣圓珠、略無^ニ大小相雜^ニ。何^ニ能^ニ勻^ニ同^ニコト如是^ノ。蓋野人敬^ニ公[、]特^ニ擇^ニ以贈^ニ、公感^ニ其厚意[、]所^ニ以驚嘆^ニ也。愁^ニ仍破^ニ訝^ニ許同^ニキ、與^ニ也自紅^ニ三字^ニ回顧有情[、]卻^ニ緊^ニ起^ニ下^ニ憶昨^ニ二字^ニ。轉振^ニ手段[、]亦訝^ニ許妙^ニナル。一聯口中噴噴不^レ已[、]宛見^ニ村夫子受^ニ野人之贈^ニ。眞^ニ春蠶結^ニ繭[、]隨^ニ物^ニ肖形^ニ也。

〔注13〕「左儀射鄭国公嚴公武に贈る」詩（詳註卷十六）の第五十一、二句。

〔注14〕訳註稿四、014「曲江酒に對す」詩の第三句。詳解に「細は片片相次いで間に落つるを謂ふ」とし、〈細〉には「チラチラト」という左訓を施す。

〔注15〕『礼記』曲礼上に「君に御食するに、君餘を賜へば、器の概^す者^はは寫さず。其餘は皆寫す」とあり、鄭玄の注に「写とは、己れの器中に伝すと。『礼記』は、錢注（卷十一）や輯註（卷九）に挙げる。

〔注16〕ちなみに、釈大典『詩語解』巻下、許の条に「萬顆勻圓^ニ訝^ニ許^ニ同^ニ」の句例を挙げ、若箇と同意とする。

〔注17〕顧宸『註解』に「愁」と「訝」と俱に下の四句從^レ生^ニじ來^ニたる。正に「也自紅」の三字と回顧情有り。却つて緊しく下の「憶昨」の二字を起す」と。宇都宮遷庵の増広本にも挙げる。

〈數回〉は、頻頻である。〈細写〉は、ちよつとずつ傾け移すのである。公の詩に「豈に成都の酒無からんや、國を憂ひて只だ細に傾く」、また「桃花細に楊花を逐つて落つ」とあつて、〈細〉の意味がみてとれるのだ。〈写〉は、傾け移すことである。「曲礼」に「器の概^す者^はは寫さず、其餘は皆寫す」とあり、註に「写は、之を器中に伝ふるを謂ふ」と。ここでは竹籠から他の器に移すことをいうのである。〈愁〉は、恐とほぼ同じ。〈仍破れんを愁ふ〉は、紅い皮が破れやすいのを氣遣うこと、それがよく熟しているためである。〈數回細

に写す〉は、いつくしむ様子を絶妙に描写している。〈訝〉は、驚感のあまり、これを疑い怪しむことである。〈許〉は、爾とほぼ同じで、此の如しの意である。〈萬顆〉の多き、当然違いがあるはずなのに、一粒一粒どれも同じようにまなまるく、大きいや小さいのがほとんど雜じっていない。どうしてこのように粒揃いであるのか。けだし〈野人〉は公を敬し、わざわざ特別に扱んで贈つてくれたのである。公はその厚意に心感じ、それで驚嘆しているのである。〈仍破れんを愁ふ〉〈許く同きを訝る〉は、〈也た自ら紅なり〉の三字とともに回顧して情思が生じ、却つてびたつと次の〈憶昨〉の二字を起こしている。転折の手段で、やはりかく妙なるのを訝る。この一聯は口中噴噴と讀えてやまず、さながら村夫子が〈野人〉の〈贈〉を受けるありさまを見るかのようなのである。眞に春蚕は繭を結ぶのに、物に隨つて形を似せるのである。

憶昨賜^ニ露^ニ門下省^ニ。退朝擎^ニ出^ニ大明宮^ニ。

二句串讀、流水對^(注18)。因^ニ野人之贈^ニ、憶^ニ昔年之事^ニ。嘗^ニ爲^ニ拾遺^ニ在^ニ門下省^ニ、四月朔^ニ、朝會^ニ、忝^ニ露^ニ恩賜^ニ、退朝擎^ニ出^ニ宮中^ニ、何等榮幸^ニ。恍惚一夢、徒^ニ感愴^ニ耳^ニ。前聯區區瑣碎、村婆絮談、此則天上盛典、光輝赫然、機關變幻、令^ニ人^ニ瞠目^ニ。不^レ曰^ニ昔^ニ而曰^ニ昨^ニ、其事猶如^ニ昨日^ニ也。擎出^ニ二字敬^ニ賜^ニ之態。恩榮之狀、寫^ニ得^ニ宛然^ニ。王詩^ニ歸鞶競帶青絲籠^ニ、中使頻^ニ傾^ニ赤玉盤^ニ、韓詩^ニ香^ニ隨^ニ翠籠^ニ擎^ニ初^ニ出^ニ、色^ニ映^ニ銀盤^ニ寫^ニ未^ニ停^ニ、可^ニ併^ニ觀^ニ也。門下省ハ後漢謂^ニ之^ニ侍中寺^ニ。晉志^ニ曰^ニ、給事黃門侍中與^ニ侍郎^ニ俱^ニ管^ニ門下衆事^ニ。謂^ニ之^ニ門下省^ニ。南北朝以來、天子以^ニ侍中常^ニ在^ニ左右^ニ、多^ニ與^ニ之^ニ議^ニ政事^ニ、遂^ニ爲^ニ宰相之任^ニ。唐朝竝^ニ尚書中書^ニ謂^ニ之^ニ三省^ニ。開元中改^ニ爲^ニ黃門省^ニ、尋^ニ復^ニ舊名^ニ。大明宮ハ即蓬萊宮、詳^ニ見^ニ于前^ニ。

〔注18〕訳註稿一、001「張氏の隱居に題す」詩の（注13）および訳註稿四、021「九日崔氏藍田莊」詩の（注13）参照。

(注19) (注6) に挙げた王維詩の頸聯。

(注20) (注6) に挙げた韓愈詩の頸聯。

(注21) 『通典』卷二十一、職官三、門下省に「門下省は後漢之を侍中寺と謂ふ」と。

(注22) 『通典』門下省の条に、(注21) に挙げた箇所に続けて「晋志に曰く給事・黃門侍中と侍郎と俱に門下の衆事を管す。或いは之を門下省と謂ふ」と。晋志は、『晋書』卷二十四、職官志のこと。

(注23) 『通典』門下省の条に「開元元年、改めて黃門省と為す」と。

(注24) 訳注稿(三)、009「宣政殿退朝晩に左掖を出づ」詩の詳解に「蓬萊は即ち大明宮。高宗の時改めて蓬萊宮と曰ふ。殿後の蓬萊池を取って名と為す。以て海上の仙山に擬す。後に復た大明宮と為す」と。

二句は一つらなりで読む、流水対の法。《野人》が《贈》つてくれたことから、昔年の事を《憶》い出した。かつて拾遺となつて《門下省》にあり、四月朔日の朝会では、忝くも恩賜に《霑》し、《退朝》のおりは《擎》げて宮中を《出》たが、何と光榮で幸運なことであつたか。ぼんやりとして一場の夢みたいで、いたずらに感傷するのみだ。前聯はくだくと瑣碎で、田舎の婆さんの繰り言みたいであつたのを、ここは天上の盛大な典礼を述べ、光輝赫然としており、構成は変幻自在で、人に目を見張らせる。《昔》といわずに《昨》というのは、その事がちょうど昨日のことのようであるからである。《擎出》の二字は《賜》わりものをやうやくしく敬んで受ける態度。恩榮のありさまをありありと写し出している。王摩詰の詩に「香競つて帯ぶ青糸の籠、中使頻りに傾く赤玉の盤」、韓退之の詩に「香は翠籠に随つて擎げて初めて到り色は銀盤に映じて写して未だ停まらず」とあり、あわせてよく見るべきである。門下省は後漢ではこれを侍中寺といった。『晋志』にいう、「給事・黃門侍中は侍郎とともに門下の衆事を管轄する。これを門下省といった」と。南北朝以来、天子は侍中が常に左右にいることから、多くこれと政事を議した。その結果かくて宰相の任となつたのである。唐朝では尚書・中

書と並んで三省という。開元年間に改めて黃門省としたが、ついで旧名に復した。《大明宮》は、とりもなおさず蓬萊宮のことで、詳しくは前に見える。

金盤玉筍無消息^一 此日嘗新^二任^三轉蓬^三

※無消息：ドウナリタヤラ 任：マ、ヨ

金盤ハ盛賜ヲ、玉筍ハ所ニ以寫スレ之ヲ。消息ハ音信也。無消息ニ言ニ其事杳然^一。蓋國家多難、朝儀衰替ス。嘗新^二盛典、今得^レヤ行^二否。身阻^二天涯^二、絶^レ不^二相聞^二也。蓬花易^レ亂隨^レ風ニ飄轉^二、無^二定在^二者。故^二比^二人^二之漂泊^二。應^{シテ}起^二句^二西蜀^二爲^二結^二。任^二轉蓬^二、一^三任^二其如^二轉蓬^二而不^二必^二自恨^二也。任者分付之辭。猶^レ言^レ不^レ管^セ也。亦不^レ得^レ已^一而強^二自安^二。蓋嘗^二在^二大明宮^二、恩榮奉^二天賜^二者、今乃流^二落^二邊陲^二、徒^二嘗^二野人之贈^二。靜^二言^二思^二之、不^レ勝^二感慨^二。故^二強^二自寬^二而不^二復管^二也。顧^二此^二與^二天子不^レ在^二咸陽宮^二同一^二嗚咽^二。公滯^二天涯^二、不^レ知^二王室安危^二何如^二。雖^二則身如^二漂蓬^二之轉^二、亦安^二任^二之^二、不^レ復敢^二自憐^二、自惜^二矣。所^レ謂^二一飯不忘^二君^二、一^二何^二切^二邪。

(注25) 訳注稿(七)、049「路六侍御入朝するを送る」詩の第二句に「消息」の語が見え、「オトツレ」と左訓を施す。またその詳解に「音問之を消息と謂ふ、猶ほ安否のごとし」と。

(注26) 訳注稿(七)、041「嚴中丞駕を枉げて過らる」詩の第三句に「地南北に分かれて流洋に任ず」とあり、詳解に「任は分付するの謂」と。その(注12) 参照。

(注27) 「詩経」邶風・柏舟や衛風・氓に見える言い方。《言》を「ここに」と訓ずるのは、朱子『集伝』に基づく。

(注28) 訳注稿(四)、021「九日藍田崔氏莊」詩に「老去つて悲愁強いて自ら寛うす」とあり、詳解に《強》に「ムリニ」、《寛》に「クツロゲル」と左訓を施す。

(注29) 顧宸「註解」に「此れ《天子咸陽宮に在らず》と同一嗚咽」と。宇都宮逵庵の増広本にも挙げる。「天子咸陽宮に在らず」は、杜甫の「冬狩

行（詳註卷十二）の第二十三句。

（注30）顧宸『註解』に「我れ漂蓬の転ずる如しと雖も、亦た宜しく之に任すべし、復た敢へて自ら憐み自ら惜まず矣」と。宇都宮遷庵の増広本にも挙げる。

（注31）（注8）参照。

〈金盤〉は賜わったものを盛り、〈玉筋〉はそれを〈写〉するためのものである。〈消息〉は、音信である。〈消息無し〉は、その事が杳然としてはいないことを言う。けだし国家多難で、朝廷の儀式も衰微していることだろう。〈新を嘗め〉る盛典は、今行われているのだらうか。身は天涯に阻まれ、絶えて聞かないのである。蓬花は乱れやすく風に随って飄り転じて、定住なきもの。それゆえ人の漂泊に比す。起句の〈西蜀〉に应じて結びとしている。〈転蓬に任す〉は、その〈転蓬〉のことに一任して必ずしも自らを恨まないものである。〈任〉とは、分付の辞。管せず（かまわぬ）というのとほぼ同じである。やはりやむを得ずしてむりやり自ら安んじる。けだしかつて〈大明宮〉にあり、恩荣天賜を奉じた者が、今はなんと辺陲に流落して、いたずらに〈野人〉の〈贈りもの〉を〈嘗め〉ている。しみじみとこれと思えば、感慨にたえない。ゆえに強いて自ら寛うして復たかまわないのである。顧註に「これは、〈天子咸陽宮に在らず〉と同一鳴咽」と。公は天涯に滞り、王室の安危はどうなっているやらわからない。身は漂蓬の転ずるが如きであるとはいえ、やはりこれに任せるのがよく、もはや敢えて自ら憐み自ら惜しんだりしない。いわゆる「一飯君を忘れず」で、いったいなんと痛切なことか。

070 章梓州ノ橘亭餞_ス成都ノ寶少尹_ヲ得_ニ涼_ノ字_ヲ

章梓州_ハ即章侍御_ノ、見_レ前_ニ。寶少尹_ハ未_レ詳_{ナリ}。少尹_ハ府尹_ノ之貳。唐書職官志_{（注3）}：西京東都北都鳳翔成都河中江陵興元興德府尹各一人、從三品。少尹二人、從四品_下。蓋寶新_{（注4）}爲_ニ成都ノ少尹_ト而自_ニ梓

州_ニ赴_ニ成都_ニ也。此公在_ニ梓州_ニ時ノ作。編次當_ニ在下_ニ寄_ニ章侍御_ニ之前_ニ。世讀_ニ杜律_ヲ者多_ク依_ル邵傳_ヲ註本_ニ、往往有_ニ錯誤_{スル}者_一。然_レトモ臨講_ニ不_レ可_ニ遽_ニ改正_ス、姑_ニ從_ニ其編次_ニ、於_ニ題下_ニ辨_レ之_一。

（注1）東陽が底本とした邵傳『集解』には、「得涼字」の三字を缺く。宇都宮遷庵の増広本に「諸本、〈少尹〉の下に〈涼字を得三字有り〉と」。

（注2）訳注稿の、054「章十侍御に奉寄す」詩。

（注3）『旧唐書』職官志ではなく、『新唐書』百官志に見える。

（注4）積大典『杜律發揮』に「蓋寶新_{（注4）}爲_ニ成都ノ少尹_ト而自_ニ梓州_ニ赴_ニ成都_ニ也」と。

（注5）前出067「暮れに西安寺の鐘樓に登り裴十廸に寄す」詩の（注7）参照。〈章梓州〉は、ほかならぬ章侍御のことで、前に見える。〈寶少尹〉は、未詳。〈少尹〉は、府尹の次官。『唐書』職官志に「西京・東都・北都・鳳翔・成都・河中・江陵・興元・興德府尹は各おの一人、從三品。少尹は二人、從四品下」と。けだし寶はあらたに成都少尹となつて梓州から成都に赴いたのであろう。これは公が梓州にいた時の作。編次は当然「章侍御に寄す」詩の前になければならない。世間の杜律を読む者は多くが邵傳の註本に依るが、往往にして誤っている場合がある。されど講義に臨んでにわかには改め直すことができないので、しばらくその編次に従つておき、題下にこれを弁ずる。

秋日野亭千橘香_シ 玉杯錦席高雲涼_シ

秋日野亭、幽趣蕭散、殊_ニ娛_ニ雅客_ヲ。千橘香_シ、撲_ニ酒_ヲ佐_ニ歡_ヲ、可_ニ以_ニ盡_ニ醉_ヲ。玉杯錦席、盛宴爛漫、何等_ノ張設_ヲ。高雲涼_シ、晴天爽氣、殊_ニ壯_ニ行色_ヲ。

〈秋日の野亭〉は、幽趣満点でさっぱりしており、高雅な客をことのほか娛しませる。〈千橘香し〉く、酒にぷうんと漂つて興を助け、心ゆくまで酔うことができる。〈玉杯錦席〉、盛大な宴は爛漫とたけなわで、何とりつばな設えなことか。〈高雲涼し〉く、晴天の爽氣がことのほか旅立ちの雰囲気をついに盛り上げる。

主人送客何所作^ス 行酒賦詩^ラ殊未央^{ナラ}

主人ハ謂^フ章梓州^ヲ作^ス音佐^ヲ何^ノ所作^ヲ猶^レ言^フ何^ノ其^ノ殷勤^ト嘆^ミ

美^メ其^ノ厚^ク之^ノ辭^ヲ即^チ指^シ前^ノ二^ノ句^ヲ而^レ言^フ殊^ニ未^ダ央^{ナラ}言^フ其^ノ所^ノ作^ヲ無^ク

窮^ニ章^ヲ爲^シ寶^ヲ出^シ錢^ヲ設^シ宴^ヲ于^ニ野^ノ亭^ニ其^ノ時^ノ物^ハ則^チ千^ノ橘^ノ正^ニ香^シ其^ノ

天^ノ氣^ハ則^チ高^ノ雲^ノ生^シ涼^ヲ玉^ノ杯^ノ行^シ酒^ヲ錦^ノ席^ノ賦^シ詩^ヲ主^ノ人^ノ之^ノ情^ハ有^リ加^ナト

而^レ無^レ已^{コト}故^ニ曰^ク殊^ニ未^ダ央^{ナラ}寶^ヲ得^シ意^ノ之^ノ行^ヲ故^ニ祖^ノ宴^ノ之^ノ盛^{ナル}如^シ

是^ノ也^{ナリ}

(注6) 邵傳『集解』に「主人」の下に「即ち章梓州」と注する。

(注7) 邵傳『集解』に「音佐、為なり」と。また錢注(卷十二) および輯註

(卷十)に「作」字の下に「音佐」と注する。

(注8) 顧宸『註解』に「章、寶を野亭に送る。其の時物は則ち千橘正に香り、

其の氣は則ち高雲涼を生ず。玉杯酒を行ひ、錦席詩を賦す。主人の情を

観ること、殊に未だ已むこと有らず」云々と。宇都宮遯庵の増広本にも

挙げる。行酒は、酒を酌んで客に奉ずること。

《主人》は、章梓州のこと。《作》、字音は佐。《何の作す所ぞ》は、

「何ぞ其れ殷勤」と言うのとほぼ同じ。その情の厚いことを嘆美す

る辞。とりもなおさず前二句を指して言う。《殊に未だ央ならず》

は、その《作す所》が窮りないことを言う。章彝は寶少尹のために

見送り、別れの宴を《野亭》に設けた。その季節の物はといえば《千

橘》がまさに香り、その天氣はといえば《高雲》が《涼》を生ずる。

《玉杯》で《酒》を《行》い、《錦席》に《詩》を《賦》す。主人の

情にはいやすことがあっても尽きることはない、それゆえ《殊に

未だ央ならず》という。寶少尹の得意の旅立ちであるので、それゆ

え送別の宴の盛大なること、このようであるのだ。

衰老應^レ爲^シ難^シ離^レ別^シ 賢聲此去^テ有^リ輝^ニ光^ニ

※声…ヒヤウバン 輝光…メンボク

衰老ノ二字、于^ニ極^ノ熱^ノ場^中忽^ニ添^ニ氷^ノ雪^ヲ使^ニ人^ヲ冷^ニ然^ニ蓋^ニ客^ノ方^ニ

行^ニ色^ノ揚^ニ揚^ニ主^ノ人^ノ亦^レ將^ニ推^ニ轂^ヲ俱^ニ壯^ノ年^ノ逸^ノ氣^ヲ不^レ以^ニ離^ニ別^ヲ爲^ニ

難^シ而^レ公^ノ獨^ニ以^ニ衰^ノ老^ヲ陪^ニ宴^ヲ亦^ニ共^ニ劇^ノ飲^ノ盡^ニ歡^ヲ但^ニ預^ニ憂^ニ宴

罷臨^ニ別^ノ之^ノ況^ヲ故^ニ曰^ク應^レ爲^シ難^シ離^レ別^シ恨^ニ其^ノ在^ニ斯^ノ世^ニ恐^{クハ}

不^レ復^ニ會^ニ也^{ナリ}賢聲輝光^ハ祈^ニ望^ニ之^ノ詞^ヲ言^フ其^ノ赴^ニ成^ノ都^ニ必^ニ顯^ニ功^ヲ

名^ヲ也^{ナリ}輯註三云、離讀^ニ去^ノ聲^ニ然^ト所^ノ字^ハ已^ニ失^レ粘^ニ蓋^ニ亦^ニ拗^ニ體^ニ耳^{ナリ}

(注9) 顧宸『註解』に「忽ち衰老の二字に接す、便ち極熱場中に于いて忽ち

氷雪を添ふ」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

(注10) 推轂は、車の轂を推して前に進めること。転じて推挙の意。

(注11) 錢注および輯註は《離》字の下に「去声」と注する。輯註は宇都宮遯

庵の増広本にも挙げる。

なお、この詩の平仄は、離字を平声とした場合、次のとおり(○は平、●

は仄。◎は平声の韻字)。

秋[○]日[○]野[○]亭[○]千[○]橘[○]香[○]玉[○]杯[○]錦[○]席[○]高[○]雲[○]涼[○]

主[○]人[○]送[○]客[○]何[○]所[○]作[○]行[○]酒[○]賦[○]詩[○]殊[○]未[○]央[○]

衰[○]老[○]應[○]爲[○]難[○]離[○]別[○]賢[○]聲[○]此[○]去[○]有[○]輝[○]光[○]

預[○]傳[○]藉[○]藉[○]新[○]京[○]兆[○]青[○]史[○]無[○]勞[○]數[○]趙[○]張[○]

第五句は、二字めと四字めの平仄が反対になり二字めと六字めとが同

じになるという二四不同二六対の原則から外れ、また孤平(●○○)と

なっており、錢注及び輯註のいうように、離字を去声(●)に読めば、

たしかにそれは解消されるが、第三句の所字が上声で仄字であるため、

二六対になっていないし、またこの場合、二句めの雲字と同じ平仄にな

らなければならぬ(粘法)から外れている(失粘)。そのことを東陽は

指摘する。

《衰老》の二字は、盛り上がって極めて熱くなっているところに突

然水や雪を添え、熱を冷まさせている。けだし《客》はまさに行色

揚揚とし、《主人》も後押ししようとしており、ともに壮年で氣を負い、

《離別》を《難》しとせず平氣の平左である。しかるに公はひとり

《衰老》の身で宴席に陪し、やはり一緒に痛飲して飲を尽くした。

されどあらかじめ宴が終ってから別れに臨むありさまを想って憂

え、それゆえ《応に離別し難きを為す》といい、この世に在っては

恐らく二度とは会えないだろうと恨むのである。《賢声》《輝光》は、

祈念願望する詞。成都に赴いて、きつと功名を顕わすだろうと言う

のである。輯註に〈離〉は去声に読むというが、しかしながら〈所〉の字がすでに失粘している。けだし、やはり拗体なのだ。

預シメ傳フ藉藉新京兆^(注12) 青史無勞^(注13) 趙張^(注14)

※無勞…セワニオヨバヌ

藉藉ハ名譽傳播之貌。二字跟シ賢聲ニ來。言彼都ノ人士預シメ已ニ傳ニ賢聲ヲ藉藉稱譽シテ俟其來上ル也。肅宗ノ時、以ニ成都ニ陞シテ爲ニ南京ト。故以ニ京兆ノ尹ヲ稱之。或ハ以爲預シメ期ニ其爲ニ三輔之京兆ト、迂ナリ矣。無勞スルコト猶云不用。趙張謂趙廣漢張敞ヲ。漢宣帝ノ時相繼爲ニ京兆ノ尹ト、俱有賢聲。吏民語テ曰、前ニ趙張、後ニ有三王^(注14)。班史ニ所載スル、流芳百世^(注15)。今新京兆之賢聲、行ク應ニ超乘シテ而出ニ其右ニ、則史筆稱ニ述セシメ其德ヲ、不ニ復用ニレ説^(注16)ト趙張ニ也。公先望^(注17)ニ之ヲ以ニ賢聲輝光^(注18)、遂ニ復仰^(注19)ニ之ヲ以ニ垂テ名ヲ帛^(注20)ニ熠耀センコトヲ千古ニ。其所ニ以祝^(注21)ニ之ヲ、可レ謂^(注22)ニ至ト矣。青史ノ二字警得^(注23)尤切ナリ。此詩上半ハ章梓州之送、後半ハ乃公之送。蓋主人送客ヲ如^(注24)レ彼之盛ナリ、公乃何^(注25)所作ス。惟是預シメ祝^(注26)ニ其功名^(注27)ヲ所レ謂送^(注28)ニ人ヲ以^(注29)レ言^(注30)者也。

(注12) 〈兆〉字、錢注及び輯註は〈尹〉に作り、「一に兆に作る」と注する。
(注13) 邵傳『集解』に「寶、少尹と爲る。因つて京兆を以て預め之を期するなり」と。また邵寶『集註』(卷二十三、送別類)に「蓋し寶已に成都の少尹と爲る。故に其の入朝するに因つて、其の陞つて三輔の京兆と爲ることを期す」と。薛益『分類』(卷二、送別、顧宸『註解』も同様の解釈。『集註』『註解』は字都宮遷庵の増広本にも挙げる。これに対して、

釈大典『杜律發揮』に「曰ハ以ニ京兆ノ預期^(注31)ニ之ヲ、似^(注32)ニ迂^(注33)」と。

(注14) 『漢書』のこと。趙廣漢・張敞の伝は、その卷七十六、趙尹韓張兩王伝に見え、その贊に「孝武、左馮翊・右扶風・京兆尹を置きて自り、吏民之が爲に語りて曰く、前に趙漢有り、後に三王有りと」と。

(注15) 『史記』卷四十七、孔子世家に老子の言として「吾れ聞く富貴なる者は人を送るに財を以てし、仁人なる者は人を送るに言を以てすと」。

〈藉藉〉は、名譽が伝播するさま。この二字は〈賢聲〉にくつつい

て来る。かの都の人士は〈預め〉もう〈賢聲〉を〈伝〉え、〈藉藉〉として誉めそやして、そのやってくるのを待ちかまえているの言う。肅宗の時、成都を昇格させ南京とした。それゆえ〈京兆〉の尹という語でこれを称する。或いは〈預め〉三輔(首都圏)の京兆尹となることを期待しているとするのは、まわりくどく適切でない。

〈勞すること無し〉は、用いずというのとほぼ同じ。〈趙張〉は、趙廣漢・張敞のこと。漢の宣帝の時、相次いで京兆尹となり、ともに〈賢聲〉があつた。吏民が語つていうのに、「前に趙張あり、後に三王あり」と。班固の史書に載せられており、芳名を百世に流した。今、〈新京兆〉の〈賢聲〉は、ゆくゆくきつとそれを超えてその右に出るに違いない。とすれば史筆にその徳を称述せんこと、今さら〈趙張〉を説くまでもないことだ。公は先ずこれに望むに〈賢聲〉〈輝光〉の語をもつてし、かくして復たこれを仰ぐに名を竹帛に垂れ千古を照耀せんことをもつてする。そのこれを祝するゆえんで、用意周到といえよう。〈青史〉の二字ははつとさせてもつとも適切である。この詩は、前半は章梓州が送り、後半になるとかえつて公が送る。けだし主人の客を送ることかくのごとく盛んであれば、公はかえつて〈何の作す所ぞ〉(何をするか)。ただ〈預め〉その功名を祝すのみで、いわゆる「人に送るを言を以てす」というものである。

071 奉^(注34)侍^(注35)嚴大夫^(注36)

開^(注37)嚴武再^(注38)鎮^(注39)成都^(注40)、喜^(注41)而待^(注42)其至^(注43)也。此宜^(注44)在^(注45)將^(注46)歸^(注47)成都^(注48)、草堂^(注49)之前^(注50)。公與^(注51)嚴武^(注52)詩皆隨^(注53)其所^(注54)受^(注55)官^(注56)而稱^(注57)之^(注58)。武去年遷^(注59)黃門侍郎^(注60)、罷^(注61)兼御史大夫^(注62)、而此題仍稱^(注63)大夫^(注64)可^(注65)疑。朱鶴齡^(注66)輯註^(注67)云、唐人凡稱^(注68)節度使^(注69)皆曰^(注70)大夫^(注71)。亦未^(注72)知^(注73)何^(注74)據^(注75)。

(注1) 訳注稿(4)、057、061「將に成都の草堂に赴かんとす、途中作有り。先に嚴鄭公に寄す五首」のこと。東陽が底本とした邵傳『集解』に「此の詩

宜しく將に成都の草堂に帰らんとすの前に在るべし」と。

(注2) 黄門侍郎については、057参照。輯註(卷十二)に「黄門侍郎に遷る時、已に兼御史大夫を罷む」と。宇都宮遷庵の増広本に挙げる。

(注3) 輯註に「唐人凡て節度使を称して皆大夫と曰ふ」と。宇都宮遷庵の増広本に挙げる。ちなみに、錢注(卷十三)には「此に大夫と云ふは、再び鎮する時の兼官なり。以後、鄭公と称す」と。

嚴武が再び節度使として成都を治めると聞いて、喜んでそのやつてくるのを待つのである。これは「將に成都の草堂に帰らんとす」詩の前にあるのがよい。公が嚴武に与えた詩は、どれもその授けられた官職に随って称している。嚴武は去年黄門侍郎に遷り、兼御史大夫を罷めた。それなのにこの詩題で相変わらず「大夫」と称しているのは疑問である。朱鶴齡の輯註に「唐人はすべて節度使を称してみな大夫という」というのは、やはり何に拠ったか分からない。

殊方又喜故人來 重鎮還須濟世才

※重鎮：タイセツノカタメバ

孤身流寓殊方、故思故人甚切、今聞其復來、喜不可言也。須用也。濟世ハ莊子ノ語。濟ハ救也。成也。上句爲身ノ喜、下句爲國ノ喜。

(注4) 例えば、『字彙』に「又た待也、資也、用也」と。

(注5) 『莊子』庚桑楚篇に「髪を簡んで櫛けり、米を数えて炊ぐ。窃窃乎として、又た何ぞ世を濟ふに足らんや」と。

(注6) 顧宸『註解』に「公、殊方に在り、故に故人を思ふこと益ます切なり。首句は一己の爲に喜ぶ。蜀は重鎮爲り、必ず濟世の奇才を須ふ。次句は全蜀の爲に喜ぶ」と。宇都宮遷庵の増広本に挙げる。「殊方」は、異域の意。

孤立無援の身で「殊方」に流寓しており、それゆえ「故人」を思うことはなほだ痛切であつて、今その再び「來」るのを聞いて、「喜」びは言葉にできないのである。「須」は、用である。「濟世」は、『莊子』の語。「濟」は、救である。成である。上句はわが身のために喜

び、下句は国家のために喜んでゐる。
嘗怪偏裨終日待 不_レ知旌節隔年_二回_一

※終日：ツネ／＼

偏裨ハ謂_二少尹以下ノ諸將校ヲ也。終日ハ猶言_二居常ト。待_レ待_二其再_レ來_一也。旌節ハ節度使ノ麾幢也。唐書職官志、天寶中、緣邊禦_レ戎之地置_二八節度使ヲ。受_レ命_二之日、賜_二之旌節ヲ。一昨年、武召_レ還朝、今復再_レ鎮蜀、實_二間_二一年ヲ、故_二曰_二隔年_二回_一。蓋偏裨諸將懷_二武之遺愛ヲ、常_二竚_二望_二其再_レ至_一。公初竊_二意_二未_三必有_二此事_一、故嘗疑_二怪_二之ヲ。不_レ知_二其果_二如_レ所_レ待_一、纔_二隔_二一年ヲ、即復_二回_二來_一、是出_二於望外_一、喜極之辭也。

(注7) 「嘗」字、錢注及び輯註は、「常」に作る。音義同じ。

(注8) 邵宝『集註』(卷二十三、簡寄類) および薛益『分類』(卷二、簡寄) それに顧宸『註解』に「偏裨は諸將校なり」と。「集註」『註解』は、宇都宮遷庵の増広本に挙げる。ちなみに、釈大典『學語編』卷上、職官類に「裨將」「偏裨」の語を挙げ、「ワキダイシヤウ」と左訓を施す。なお、少尹は、前出070の詳解に「少尹は府尹の貳」とあるように文官で、これを「諸將校」の中に含めるのは、妥当ではない。

(注9) 居常は、いつも、常にの意。ちなみに、釈大典『杜律發揮』に「終日ハ鎮長也」と。「鎮長」も、常にの意。

(注10) 邵宝『集註』および薛益『分類』に「旌節は節度使の麾幢なり」と。

(注11) 顧宸『註解』に「(注13)に挙げた箇所に續けて「唐の職官志に、天寶中、緣邊戎を禦ぐの地、八節度使を置く。命を受くるの日、之に旌節を賜ふ」と。宇都宮遷庵の増広本に引く。「旧唐書」職官志に見える。

(注12) 釈大典『杜律發揮』に「三四言_二偏裨ノ諸將常_二竚_二望_二武之再_レ至_一。余意_二怪_二訝_二其徒然ヲ。而_レ不_レ知_二其果_二如_レ所_レ待_一」。

(注13) 顧宸『註解』に「偏裨、(嚴)武を愛す。日に其の再び來らんことを望む。公疑_二ふらく未_二だ必ずしも此の事有らじと。故に嘗て之を怪しむ。意はざりき去年召還されて今復た鎮す。是れ纔かに一年を隔てて即ち回_二るなり。正に喜び極まるの詞」と。宇都宮遷庵の増広本にも挙げる。

〈偏裨〉は、少尹以下の諸將校のことである。〈終日〉は、居常というのとは同じ。〈待〉は、その再び来るのを待つのである。〈旌節〉は、節度使の麾幢である。『唐書』職官志に「天寶中、辺境を防禦する要地に八節度使を置いた。任命の日、これに旌節を賜わった」と。一昨年、嚴武は召されて朝廷にもどったが、今再び蜀を治めることになった。実に〈一年〉を隔てているので、それゆえ〈隔年に回る〉という。ただし〈偏裨〉の諸將は嚴武の遺愛を懐い、常にその再び至らんことを首を長くして〈待〉ち望んでいたのに、公は初め心ひそかに、必ずしもそんなことはあるはずがないと思っており、それゆえ〈嘗て〉疑い〈怪〉しんでいたのだが、はからずも果して〈待〉っていたとおりとなり、わずかに〈一年を隔〉てただけで、すぐに再び〈回〉つてきた。これは望外に出たことで、〈喜び〉が頂点に達した言葉である。

欲^レ辭^二巴^一微^二啼^レ鶯^一合^二聲^一 遠^下下^二荆^一門^二去^レ鶯^一催^二聲^一

〔微音叫。西南邊界曰微。猶東北謂之塞也。巴微ハ謂閬州。欲^二辭^一巴微^二言^一將^二爲^一荆南之遊。合猶云^レ遍^二啼^一鶯合^二言^一彼此相和^二到處綿蠻^一。謂^二春^一已^二深^一也。鶯音逆。水鳥能避^レ風。故^二江頭^一人彩色畫^二於船頭^一、以爲^レ飾。因謂^レ船爲^レ鶯。去^二鶯^一催^二言^一舟已^二欲^一發^二也。公自^二武^一之去^二、在^レ蜀無^レ所^レ依^レ、乘^二啼^一鶯合^二之候^一、方^二欲^一辭^二巴微^一而遠^二下^一荆門^一、去^二鶯^一旦夕將^レ發^二、適^二當^一是之時^一、聞^二武^一再^二鎮^一蜀、遂^二不^レ果^レ行^二、留^レ以待^レ之^一。蓋^二始^一欲^二彼此相失^一、而幸^二得^レ不^レ離^一、齟齬^二、亦自喜^一之詞也。去^二鶯^一借^二對^一。〕

〔注14〕 例えは、『字彙』に「東北之を塞と謂ひ、西南之を微と謂ふ」と。これは『漢書』卷九十三、佞幸伝、鄧通伝の顔師古注に拠る。

〔注15〕 邵傳『集解』に「巴微は閬州なり」と。

〔注16〕 小鳥の啼るさま。疊韻の語。『詩經』小雅・縣蠻に「縣蠻たる黃鳥、丘阿に止まる」とあり、毛伝に「小鳥の貌」、集伝に「鳥声」と。

〔注17〕 例えは、『字彙』に「鶯と同じ」とあり、「鶯、宜戰の切。音逆」と。

〔注18〕 訳注稿(三)、008「賈至舍人早に大明宮に朝するを奉和す」詩の頸聯に「旌旗日暖かにして龍蛇動き、宮殿風微かにして燕雀高し」とあり、その詳解に「龍蛇燕雀、真反對を取る、之を借對と謂ふ」と。その〔注27〕参照。ここでは〈鶯〉は本物のそれではないから仮で、〈鶯〉は本物であるから真。

〔微〕、字音は叫^{きよう}。西南の辺境を微という。東北を塞というのと同じようなものである。〈巴微〉は、閬州のこと。〈巴微を辞さんと欲す〉は、まさに荆南の遊をなさんとするのを言う。〈合〉は、遍というのとは同じ。〈啼鶯合す〉は、あちらとこちらとで唱和して到る処で啼っているのを言い、春がすでに深まっていることである。

〔鶯〕、字音は逆^{ぎやく}。水鳥は風を避けることができるので、それゆえ長江沿いの人は彩色で船頭に画き、裝飾とする。そこから船を〈鶯〉という。〈去鶯催す〉は、舟がもはや出発しようとするのを言うのである。公は嚴武が去つてから蜀にいても頼るところなく、〈啼鶯合する時候をしおに、まさに〈巴微を辞し〉て〈遠く荆門を下〉ろうとした。〈去鶯〉が旦夕のうちにこれから出発しようという矢先、ちようどびつたりこの時に、嚴武が再び蜀を治めると聞き、とうとう行くことを果たさず、留つてこれ待った。けだしほとんどお互い行き違いになるところを、もつての幸いで掛け違いにならずに済んだ。やはり自ら喜ぶの詞である。〈去鶯〉は、借對。

身老^レ時危^二思^一會^二面^一 一生襟抱^二向^レ誰^一誰^二開^一襟

襟抱^二胸臆^一也。南史^二齊^一張充謂^二王儉^一曰、所^レ可^二推^一襟^二送^一抱^二者、只大人一人。公身既^二衰老^一、時猶禍亂、懷抱^二蘊結^一、悠悠無聊、只庶幾^二待^一故人^二而得^レ有^一所^レ慰^一焉。此時若^二齟齬^一、失^二會^一面^二、則更^二有^一誰^二如^一武者^二而一^レ抒^二寫^一懷抱^二邪^一。幸^二及^一吾行舟未^レ發^二、而得^レ聞^二故人^一之來^二、所^二以^一喜^二待^一也。

〔注19〕 『南史』卷三十一、張裕伝に附された張充の伝に、「王儉に与ふる書」を挙げ、そのなかに「夢に通じ魂を交え、襟を推し抱を送る可き所の者

は、唯だ丈人のみ」と。

《襟抱》は、胸臆である。『南史』に「斉の張充、王儉に謂ひて曰く、襟を推し抱を送る所の者は、只だ大人一人のみ」と。公は衰老の身である上に、当時まだ禍乱が続く、胸の内は結ばれ、心憂いて遣る瀬なく、ただどうか《故人》を《待》って慰めるところありたいものだと願うのである。この時、もし掛け違つて《会面》の機会を失つてしまえば、この上さらに誰か嚴武のような者がいて一たび胸の内を洗いざらい述べ尽くせようか。もつきの幸いで吾が行舟のいまだ発せぬうちに、《故人》の《来》るのを聞くことができた。《喜》んで《待》つゆえんである。

072 至後

冬至後一日爲至後^(注1)。是日有所感スル、懷^テ故郷^ヲ而作也。

〔注1〕邵傳『集解』に「冬至の前一日を小至と爲し、後一日を至後と爲すなり」と。

冬至の一日後を《至後》という。この日、心に感ずることがあつて、故郷を懷つて作つたのである。

冬至至後日^テ初^テ長^シ

遠^ク在^ニ劍南^ニ思^フ洛陽^ヲ

日初長ハ所謂添^(注2)一線也。劍南洛陽、名且美惡相反ス。況其實^ヲ乎。所以悲^ム也。

〔注2〕訳注稿(四)、022「至日興を遣る。北省の旧閣老・両院の故人に奉寄す二首」其一の第八句に「日日愁は一線に随つて長からん」と。

《日初めて長し》は、いわゆる「一線を添ふ」である。《劍南》と《洛陽》とは、名称でさえ美惡相反する。ましてやその実質においてはなおさらだ。悲しむゆえんである。

青袍白馬有^ニ何意^一

金谷銅駝非^シ故郷^ニ

※有何意…アホラシイ 非故郷…アレハテツラン

青袍白馬へ、梁ノ侯景^カ故事。指^下一時寇賊憑^ニ陵^ニ。讖^ヲ者^上。洗兵

馬行^(注3)亦云、青袍白馬^ニ何^カ有、後漢今周喜^ニ再^レ昌^一。或^ハ爲^ル公

嘆^ニ身老^テ不遇^一爲^ニ嚴武^カ幕客^一、誤甚。金谷水銅駝街、竝^ニ洛陽^ノ名勝、石崇索靖^カ故事、竝^ニ見^ニ晉書^一。顧^ニ註^ニ云、庾信哀江南、賦^ニ桀黠構扇^ヲ、憑^ニ陵讖^ヲ、青袍如^レ草、白馬如^レ練。天子履端廢^レ朝、單于長圍高宴。公正^ニ用^ニ此語^一、以^ニ侯景之亂^ヲ喻^ニ安史之禍^一、洛陽盡^ク遭^ニ焚劫^一。今日思^ニ之^一、寇賊紛紛、果^{シテ}何^ノ意^ヲ。而金谷銅駝、已^ニ非^ニ昔^ノ復^ニ吾故郷^ノ景物^一矣。兩句緊^{シク}承^ニ思^ニ洛陽^一、有^ニ何^ノ意^一三字、正^ニ是恨^ニ其妄^ヲ誅^ニ其心^一耳。非^ニ故郷^ノ三字、寫^ニ出^ニ荒涼邱墟之狀^一、謂^ニ其非^ニ昔日之金谷銅駝^一矣。此說得^レ之、諸解皆誤^ル。履端廢^レ朝、言^ニ廢^ニスル^一冬至ノ朝賀^ヲ、則^ニ白馬青袍暗^ニ照^ニス^一題面^一、非^ニ泛^ニ用^ニ之^一矣。有^ニ何^ノ意^一、猶^レ云^ニ終何事^一。笑^ニ安史之輩^一徒^ニ驕^ニ一時^一也。公喜^ニ聞^ニ官軍破^レ賊^一詩^ニ乞^ニ降^ニ那^一得^ニ、尙^レ詐^ニ莫^ニ徒^一勞^ニス^一ルコト、正^ニ此義^一也。

〔注3〕「洗兵行」(詳註卷六)の第三十五、六句。

〔注4〕邵傳『集解』に「公、嚴武の幕に在り、青袍を服し白馬に乗る」と。顧宸『註解』に「青袍白馬は、旧註に云ふ、公自ら言ふ止だ服は九品の服耳。公詩の《青袍朝士最も困ずる者》なり。白馬の二字、劉須溪云ふ、青袍白馬、眼に小子輩紛紛として起つを見ると、亦た非なり」と。《青袍朝士最も困ずる者》は、「徒步帰行」(詳註卷五)の第七句。

これに対して、仇兆鰲は「青袍白馬は劍南の幕府なり。(中略)此の詩の青袍白馬は、《洗兵行》に引く所の《侯景伝》と同じかず。朱注(輯註卷十一)に公詩の《青袍也た公自りす、《帰り来てつて馬蹄を散ず》を以て證と爲し、皆幕府を指して言ふ。《何の意有らん》と曰ふ、志自ら展ぶるを得ざるを言ふなり。旧注、青袍白馬を以て安史に比す、則ち《有何意》の三字、却つて説き去らず矣」と解する。《青袍也た公自りす》は、悶を遣らんとして嚴公に呈し奉る二十韻(詳註卷十四)の第六句。《帰り来てつて馬蹄を散ず》は、「村に到る」詩(詳註卷十四)の第六句。

鈴木虎雄『杜少陵詩集』(卷十四)も仇説に拠つて「節度の幕府に在りて便服たる青袍を着け、或いは白馬に乗るをいふ」と説く。

〔注5〕石崇は卷三十三、索靖は卷六十に、それぞれ伝がある。石崇は金谷に

贅を凝らした別荘があった。李白の「春夜桃李園に宴するの序」（『古文真宝』後集卷三）に「罰杯は金谷の酒数に依らん」と言うそれ。索靖には先を見通す識見があり、いずれ天下が乱れるのを知って、宮門の銅駝を指さして、きつとそなたを荊棘のうちに見るようになるうと言ったという。

（注6）顧宸『註解』に（注4）に挙げた箇所が続いて、「庾開府哀江南の賦に（桀黠構扇して幾句を憑陵す、青袍草の如く、白馬練の如し。天子履端朝を廢し、単于長圍高晏と。公正に此の語を用ひ、侯景を以て安史の乱に喩ふ。洛陽尽く焚劫に遭ふ。今日之を思へば、寇賊紛紛、果して何の意を萌す。而して（金谷銅駝）、已に復た吾が故郷の景物に非ず矣。兩句緊しく（洛陽を思ふ）を承け、（何の意有る）の三字、正に是れ其の妄を恨み其の心を誅する耳」と。宇都宮逸庵の増広本にも挙げるが、それに「桀黠構扇」と訓点を施すのは、誤り。傑黠は、わるがしこい大悪人。構扇は、事をかまえて煽動する。憑陵は、勢いをたのんで暴威を振るう。疊韻の語。履端は、曆の始め。元旦をいうが、東陽は冬至を指すと解する。誅心は、その心ばえを責める。

（注7）至徳二載（七五七）の作、「官軍の已に賊境に臨むと聞くを喜ぶ二十韻」詩（詳註卷五）の第十五、六句。

〈青袍白馬〉は、南朝梁・侯景の故事。一時寇賊の幾句（首都圈）を憑陵せし者を指す。「洗兵馬行」にも云う、「青袍白馬更に何か有らん。後漢今周再び昌を喜ぶ」と。或いは公が身老いて不遇で、嚴武の幕客となつてゐるを嘆じたとするのは、誤りもはなはだしい。〈金谷・水・銅駝〉街は、ともに洛陽の名勝。石崇・索靖の故事で、ともに『晋書』に見える。顧註に云う、「庾信の『哀江南の賦』に（桀黠構扇して幾句を憑陵し、青袍草の如く、白馬練の如し。天子履端朝を廢し、単于長く高宴を囲む）と。公はまさにこの語を用ひ、侯景の乱をもつて安史の禍で洛陽が残らず焼き打ちや掠奪に遭つたのを喩えた。今日これを思うに、寇賊紛紛として、結局いつたい（何の意）（どういつつもり）か。しかし（金谷）（銅駝）は、すでにもはや吾が（故郷）の景物ではなくなつてしまつてゐるだらう。兩句

はびたつと（洛陽を思ふ）を承け、（何の意有る）の三字は、まさしくその妄動を恨みその心ばえを責めるのだ。（故郷に非ず）の三字は、荒涼とした廢墟のありさまを写し出し、その昔日の（金谷）や（銅駝）ではないことをいう」と。この説がよろしきを得ており、諸解はどれも誤まる。「履端朝を廢す」は、冬至の朝賀を廢することと言う。とすれば（白馬）（青袍）は、暗に題面と照応し、漠然と用いたのではない。（何の意有る）は、「終に何事ぞ」というのとほぼ同じ。安史の輩がいたずらに一時に驕りしを笑うのである。公の「官軍の賊を破ると聞くを喜ぶ」詩に「降を乞ふも那んぞ更に得ん、詐を尚んで徒に勞すること莫かれ」というのは、まさしくこの意味である。

梅花欲_レ開_レ不_二自覺_一 棟蓼一別永_ク相望_ム

上句感_ス歲月之速_ニ移_ル、下句傷_ム兄弟之久別_ヲ。梅花ハ至後之節物、二十四番第一ノ花信。歲月易_レ遷_リ、已_ニ是至後之天、早芳應_レ候_ニ欲_レ開_ト、而愁中度_レ日_ヲ、無意_ニ待_ニ花_ヲ、故不_二自覺_一、乍見而感傷_{スル}耳。詩ノ小雅・棠棣之華、鄂_ト不_ニ讌_ニ韓_ニ韓_ニ。凡今之人、莫_レ如_ニ兄弟_ニ。後人因_ニ此詞_ニ、謂_ニ兄弟_ニ爲_ニ棟蓼_ト。永相望_ムハ常思而不_レ已_也。蓋因_ニ梅花_ニ觸_ニ棟蓼之感_ニ、總是思_ニ鄉_ニ之切_{ナル}、所謂看_去亂_ニ鄉愁_ニ也。

（注8）例えば、明・焦竑『焦氏筆乘』卷三、花信風の条に「唐詩に二十四番花信の風と。一月二氣六候あり、小寒自_リ穀雨に至る、四月八氣二十四候。候毎に五日一花の風信を以て之に応ず。小寒の一候は梅花」云々と。五日を候とし、三候（十五日）を氣という。

（注9）早芳は、梅を指す。初唐の李嶠「梅」詩（『李嶠百二十詠』／『全唐詩』卷六十）に「大樹寒光を斂め、南枝独_リ早く芳し」とあるのによる。

（注10）『詩經』小雅・常棣。毛伝に「韓韓は、光明なり」と。

（注11）訳注稿六、033「裴迪蜀州の東亭に登つて客を送り、早梅に逢いて相憶うて寄せらるるを和す」詩の第六句に「若_レ爲_ニせん看_去つて郷愁を乱さんと。

上句は歳月の速やかに移るのを感じ、下句は兄弟の久しく別れてい
ることを傷む。《梅花》は《至後》の節物で、二十四あるうちの第一
番目の花便り。歳月は遷りやすく、もうはや《至後》の時節となつ
ており、早く芳しいといわれる花が時候に応じて開こうとしているの
に、《愁ひ》のうちに日を渡り、花を待ち望むような気持ちにはさらさ
らなく、それゆえ《自覚》せずにいたが、ふと見て感傷するのだ。
『詩経』小雅に「棠棣の華、鄂として韓韓たらざらんや。凡そ今の
人、兄弟に如くは莫し」と。後人はこの言葉にちなんで兄弟のこと
を《棣萼》とする。《永く相望む》は、つねづね思つてやまないの
である。けだし《梅花》に因つて《棣萼》の感に触発され、すべて故
郷を思うことの切なるもので、いわゆる「看去つて郷愁を乱す」で
ある。

愁極^テ本憑^テ詩^ニ遣^ル興^ヲ

詩成^テ吟詠^{シテ}轉^ニ淒涼^ニ

※淒涼……ウラサビシ

興^ハ猶^レ思^フ也。悲^ニ故郷^ヲ懷^ム諸弟^ヲ、無^レ可^ニ奈何^{トモス}、所^ニ以^ニ愁極^ル。
詩^ニ性^ニ情^ニ、因^テ欲^ニ借^ニ詩^ニ遣^ル思^ヲ、終^ニ不^レ能^レ遣^{コト}、卻^テ轉^ニ増^ニ淒
涼^ニ而已^ニ。將^ヲ奈^ハ何^{セン}哉。

(注12) 杜甫の弟については、訳注稿⑤、「別れを恨む」詩の(注20)参照。

(注13) 類似した表現として、例えば、南宋・嚴羽『滄浪詩話』詩弁には「詩
なる者は性情を吟詠するなり」とあり、わが国の林羅山(一五八三―一

六五七)『五經大全跋・詩経』(『林羅山文集』巻五十三)は「嗚呼、詩な
る者は性情を言ふ」という。性情・性情ともに人の本性として有する感
情。古くは『毛詩』大序に「性情を吟詠して、以て其の上を風す」と見
える。ちなみに、東陽の『夜航余話』巻下に「詩歌はもと無用の物なれ
ど、性情を吟詠するの道具にて、無用の用に備はりて行はる」と。

(注14) 顧宸「註解」に「結の二句、本と詩を借りて思ひを遣らんと欲す、終
に遣ること能はず、転た淒涼を増すのみ」と。宇都宮逕庵の増広本にも
挙げる。

《興》は、思とはば同じ。《故郷》を悲しみ弟たちを懷つても、どう

することもできず、《愁ひ極まる》ゆえんである。詩は性情を詠する
ものであるから、それで《詩》を借りて思ひを《遣》ろうとするが、
結局は《遣》ることができず、かえつて《転》た《淒涼》を増すば
かりだ。いったいどうしようか、どうしようもないのである。

* * *

前稿補訂

『杜律詳解』訳注稿③(『文化情報学部紀要』第二巻)

152頁下段29行 (注21)に追加。ちなみに、蔣一葵は、字は仲舒。万曆二十
二年(一五九四)の舉人で、著に『堯山堂外記』『長安客話』等がある。

『杜律詳解』訳注稿⑤(『文化情報学部紀要』第四巻)

150頁上段23行 空字好字に与いて↓空字好字に与いて

『杜律詳解』訳注稿⑥(『文化情報学部紀要』第五巻)

199頁上段9行 頼むのである、↓頼むのであるが、

『杜律詳解』訳注稿⑦(『文化情報学部紀要』第六巻)

125頁上段21行 《詩興》の振るわないことを↓詩興の振るわないことを

146頁下段13行 景色は愁えるがごとくである。↓景色は《愁》えるがごとく
である。

『杜律詳解』訳注稿⑧(『文化情報学部紀要』第七巻)

156頁下段7行 それゆえ常に沙岸が崩れ壊れて《葉欄を損する》事態を招く
のを憂えていた。↓それゆえ《沙》岸が《崩》れ壊れて《葉欄》

を《損》する事態を招くのを《常》に憂えていた。

この他、『杜律詳解』訳注稿④(『文化情報学部紀要』第三巻)の014「曲江酒に
対す」詩の詳解に「細は片片相次いで間に落つるを謂ふ」とあるのは、釈大典

『詩語解』巻下、細の条に「桃花細逐楊花落、言桃片楊片相次閉落也」と
いうのに基づき、訳注稿④(『文化情報学部紀要』第七巻)の060「將に成都に

赴かんとして途中作有り、先づ嚴鄭公に寄す五首」其四の「信有人間行路
難」の信字に「タガハズ」と左訓を施すのは、同じく『詩語解』巻上、信の条

に「信不^レ差也」とあるのに拠つたものであろう。

(二〇〇八・九・一六初稿)

(二〇〇九・一・六補稿)

にのみや・としひろ／文化情報学部教授
E-mail: ninomiya@sugiyama-u.ac.jp